

## 県民講座「長良川河口堰と生物多様性」 講演録

日 時：令和 2 年 8 月 30 日（日）

場 所：ウインクあいち 1002 会議室

（原田委員）

お時間がやっまいりましたので、皆様お席にお戻りくださいますようお願いいたします。はい。いいですか？始めますね。皆さんこんにちは。今日はどうぞよろしくお願ひいたします。愛知県長良川河口堰最適運用検討委員会県民講座、今回のタイトルは、長良川河口堰と生物多様性と題して贈らせていただきます。サブタイトルは、川は生きている！川はおもしろい！川で遊ぼう！というタイトルで、今日は世代を超えた登壇者の皆さんが、それぞれの立場から、川の魅力、川の課題など、語っていただこうと思っております。今年、生物多様性、あいちなごやで行われました COP10 から 10 周年でございますので、その話にも触れていきたいと思ひます。

まずはですね、我々の座長であります、小島座長からコメントを、ごあいさつを皆様にしていただこうと思ひます。小島座長、お願ひいたします。

（小島座長）

小島です。こんにちは。コロナウイルスの思わぬ第二波、と言うのですか、第一波の残り火と言いますか、それで開催できるのかどうか、非常に心配をしておりましたけれども、何とか開催できて、よかったな、と思ひます。コロナ対策もあって、結構不自由な形で進行いたしますけれども、このコロナって、多分、来年いっぱい続くということで覚悟しながら新しい方法を考えていかなきゃいけないかなど。今回の愛知県も東京も大変でしたけれども、これって第一波の残り火ですから、専門家が考えていた第二波っていうのは今年の秋冬ですよ。インフルエンザとともにやってくる、コロナの波っていうのを第二波と考えていますので、まだまだ油断はできない。もう 1 個大きな波が、冬に、秋冬にある、ということに覚悟しながらですね、毎日を過ごしていかなきゃいけない。こういう時代になってしまったわけです。で、今年、生物多様性、10 年前、COP10 なんですね。2 年に 1 回ありますから、COP15、今年やるはずだったんですけども、コロナの影響で来年の 5 月に延期になりました。中国でやるっていうのがいいですよ。だいたい 10 年毎に、コロナウイルスっていうのは出てきているわけです。20 年前は SARS、それで中東の MARS、そして今度の新型コロナウイルス。だいたい 10 年毎に来ているわけです。もともとはそれぞれの地域の風土病だったんですけども、人間が生き物との接点、生き物の領域に入っていくということで、コウモリとかそういう動物の中にいたウイルスが人に感染し、やがて人と人との間で感染するっていうことです。から、もうこういう感染症というのは、10 年後とかこれからもやってくる、そういう時代に我々は生きているということになるわけです。そういう意味では生物多様性というのも人間の住む領域と生き物が住む領域というのが、どんどんどんどん分かれていたんですけど、どんどん人間が侵食をしていって、侵食をした結果、動物の中にいたウイルスを人間の中に取り込んだ。こういうことが今起こっている現象です。来年中国である生物多様性、非常に面

白いと思います。

IPBES という、政府と科学者の会議があって、その報告書が出ています。地球規模評価報告書というものです。10年前はですね、COP10 の時は、生態系サービスという言葉をやッチコピーに使って使っていました。10年経って、今、NCP と言う、そういう言葉を今使っています。人が、自然が人にもたらすもの、Nature' s contributions to people と言う、こういう概念を使います。国際会議ってというのは、言いたいことをテクニカルターム的、専門用語的に、キャッチーな言葉を作って議論を深めていくということで、今回は生態系サービスから NCP という言葉を使っています。で、直接的に生態系を破壊するものを間接的に破壊するもの、そういうものがあるということを行っています。

相変わらず生物多様性というのは損なわれ続けているということなんですけれども、生物多様性条約ってというのは 30 年前にできたんです。1992 年、リオデジャネイロの会議なんですけれど。30 年前に僕も行きました。ちゃんと生きてた。一生懸命仕事してましたから。その時に気候変動条約と生物多様性条約というのができたんです。これ 30 年前です。この 30 年間の間に、両方とも非常に影響が深刻になってきた。

気候変動はもうあれですね。30 年前に、「本当かよ」「そんなことがあるのかよ」とみんな言ってたんですけども、今や、日本近海の海がものすごく暑くなって、1.5 度ぐらい暑くなってますよね。台風は、南の海で発生して日本へ来るっていうのは、僕ら 50 年前の教科書です。今は日本近海で発生していきなり来ちゃう。これ、海が熱くなったからですね。で、降雨、特に雨が降るかもわからない。タイにいた時はスコールがあったんですけど、今、日本でもスコールっていうのを経験をします。日本の気候が亜熱帯に。生物多様性も何だかんだと言ってるうちに、どんどんどんどん悪化しています。

30 年前はですね、ブラジルのアマゾンを守れて言ってたんですけども、今のブラジルの大統領は、アマゾンは開発しなきゃいけないということを行っています。アフリカ、アマゾンが二つの地球の肺と言われて、インドネシアがもう一つ、2分の1の肺。世界の三つの肺というものが大切だと言われたんですけども、それも人間がどんどんどんどん入って入っているってことで、この悪化の状態を変えなきゃいけないってことで、キーワードがレバレッジ・ポイント、つまり、介入点ですけど、テコですね。いろんな人、科学者も政府も、若い人もお年寄りも、もうみんな力を合わせて、このテコを動かさないと、生態系ってというのは、改善の方向にいかないんだ、ということが COP 15 のテーマになっています。

最後のスライドですけども。海と川。淡水ですか、川ですね。海と川についても、いろんな目標が掲げられています。例えば川について言えば、水資源管理とランドスケーププランニングの統合ということで、水に対する越境協力が、国と国、県と県というものが協力をしなきゃいけない、あるいはダムなどの構造物によって川が分断される。その影響の対策も必要だと。地域の水循環、水がちゃんと栄養分もそうだし、そういうものが循環をしていく。そういうことが大切だ。テーマにはなっているんですけども、大体テーマになっているということは、実現していないからテーマになってるわけですから、こういう議論をして行動に移していかないと、川の生態系、海の生態系も良くならない。この議論が、本来は今年でしたけれども、来年行われるということで、10 年前、名古屋、愛知県で行われた COP 10 の 10 年後のテーマというのが、今こんな状況にあります、ということのご紹介であります。これ

を最初にお話をさせていただきます。以上です。

(原田委員)

はい、小島敏郎座長ありがとうございます。これを今日の導入とさせていただきます、本日4時まで、皆さんお付き合いどうぞよろしく願いいたします。

今日のプログラムはですね、最初、鉄崎幹人さんによりまず基調講演を行いまして、そのあとに若者代表で今井君に登壇していただきまして、若者から見た生物多様性を語っていただき、その後休憩で、その後にパネルディスカッションとさせていただきますので、皆さん、これから、鉄崎さんや今の小島座長、そして今井君への質問はアンケート用紙にお書きいただきまして、休憩の際に集めさせていただきます。

それでは、鉄崎幹人さん、テッチャンなんですけれども、テッサマでもありますよね。今日はお越しいたくださいませ誠にありがとうございます。では、鉄崎幹人さんによりまず講演をお願いしたいと思います。

(鉄崎氏)

はい、皆さんこんにちは。大変な中でお集まりいただきどうもありがとうございます。今からしばらくの間、ちょっと、川をテーマにしたお話をさせていただきたいと思いますが、今回、「川の生物多様性～自然は楽しい、だからこそ守りたい～」というテーマにさせていただきました。これは、自然歩行の原点だと僕は思ってるんで、森だとか、海も含めてですね、守らなきゃいけないっていうふうに、学校の先生から教わるものではなくて、ものすごく楽しいから、森も川も海も、そんな楽しい場所が無くなるのは嫌だ。汚れるのは嫌だ。これが僕は自然保護の原点だと思ってるので、そんな楽しい話を中心にできればいいかなと思っています。

私、名古屋 COP 10 のですね、名古屋生物多様性アドバイザーというのを、10年前にやらせていただきました。それからあとは、名古屋市水辺研究会という会の会員でもありますので、しばらくの間お付き合いください。お願いいたします。

まずですね、庄内川にスポットを当ててみました。庄内川というのが、名古屋を代表する川なんですけれども、どうして庄内川は汚れていくのかというのを、順を追ってわかりやすく映像にしてみましたのでまずはご覧ください。庄内川はどこから汚れていくのか。そうすると、川と人との関わりというものがでてくるんじゃないでしょうか。

庄内川がまず生まれる場所は、岐阜県の恵那市夕立山という場所ですね。この夕立山、この源流域には湿地があります。湿地が水源のもうほとんど占めているというような感じの場所なんです。はい。こんな感じです。全長で言いますと長良川には及ばない庄内川なんですけれども、こういった水ゴケが非常にたくさんあって、これがものすごい保水力を持っているわけですね、はい。水源はだいたいこんな感じになっていますね。晴れた日でも、ちょろっと水がしみ出てきている、そんな場所です。そしてどんな川でもそうですけれども、生まれたての水というのは非常に美しい、はい。

ではちょっと川の生き物を見てみましょう。まずはのんびりと水の中をご覧ください。と思います。僕なんかね、こうやって夏にね、シュノーケル付けてね、水の中、川の中見てる

の大好きなんです。ただもうそれだけでいい。そこに魚が泳いで。こんなアブラハヤが見られればいいですね。アブラハヤっていう魚は結構指標になる魚で、冷たくて綺麗な水、さらに水生植物なんかの必要とする魚なんで、これがたくさんいるというのは、僕は、いい川だなあというのが大きな条件だと思います。

で、もうちょっと下ってきますとね、こんどはアブラハヤがカワムツっていう魚に変わってくるわけですね。もちろんアブラハヤ、カワムツ、オイカワなんていうのは、同居をもちろんしているんですけども、割ともうちょっと幅広い流域に住んでいるのが、このカワムツ。この川の中で遊ぶには、これ、こういう餌を1個、ぴゅっと入れるだけでものすごく魚が集まってくるんだよね。これ牛タンです、今の、はい。

そしてアユ。アユはもう本当に長良川のシンボルですけども。何と言いますかね、見るとアユってめちゃめちゃせわしない泳ぎをしているんですよ。そりゃお前ら1年で死ぬなっていうぐらい、なんかせわしないんですよ。縄張りを作ってね、他の魚を追っ払いながら暮らしています。

僕はこの魚が大好きで、カマツカってというコイの仲間なんですけども、ちょうど口のところにヒゲがあってね。これ海、川の底に沈んでいるデトリタスなんかを食べてるんですけども、かわいい魚ですね。これもそんなにお目にかかることはできない、そんな魚です。

はい、まあ川の中をご覧いただきましたけども、ちょっと順番に上流から生物相の違いを見ていきたいと思います。最も川の最上流に棲むのがやっぱりイワナですね。そしてアマゴ。これがいわゆる溪流の魚と言われているものですね。

こっから、水生昆虫を見ていきますけれど、これカワゲラの幼虫、これヒラタカゲロウの幼虫、これもカゲロウですけど、僕が思うに、このカワゲラ、エルモンヒラタ、チラカゲロウ、これがいれば、間違いなく水は綺麗ということです。これがもう本当に冷たくて綺麗な水を表す、そんな水生昆虫だと思います。

それから、これですね、ヘビトンボ。ヘビトンボの幼虫なんですけど、これ、やっぱり冷たくて綺麗な水にしかいません。これが見つかるやっぱり嬉しいですね。やっぱり数がだいぶ減っている生き物だと思いますし、ちなみにこれはマゴタロウムシっていう名前、あの、僕食べましたけど、なかなかおいしい食べ物でもあるんですね。佃煮にするとおいしいですね。あとはサワガニ、指標になる生き物ですね。

それから、ちょっと下がってくると、上中流部にいくと、こんどはナベブタムシっていう、地味な虫なんですけど、これがわーっとたくさんいると、その川は綺麗だよってことを示してくれている気がしますね、はい。ナベブタムシという、そんな水生昆虫です。

それからあとは、この石にべたべたとくっついてますね。これヒゲナガカワトビゲラと言いますが、糸を出してね、こういう小石なんかをくっつけて、巣を作って暮らしています。当然、幼虫ですから、成虫になると羽が生えてパタパタ飛んでいって、さっきのイワナやアマゴ、カワムツたちの大事な餌になってくれるわけですね。で、あとこのヒラタドロムシっていう、これが結構石にべったりくっついてることがよくありまして、何か変な感じですけど、これも幼虫なんですけど、これも比較的水質が良い場所でしか見つからないというそんな生き物です。それからあとは、両生類のカジカガエルですね。これは川の比較的上流部に住んでいるカエル。これがねえ、夏にこう涼しげな声で鳴いていると、なんか川が本当に

いい川に思えてきますよね。声とワンセットでね。それから、これはカワガラスですね。はい。こうやって潜って、水生昆虫食べて、で、またびゅっと出てくるというね。はい。こんな鳥がいるとまた川はいいですね、綺麗な水辺にしかいません。あ、今食べてますね、水生昆虫をね。

それからあとは、トンボだと、やっぱり綺麗な川にいるトンボというのはまずこのミヤマカワトンボという、この羽根がちょっと茶色くて、こう胴体がね、めちゃめちゃメタリックで綺麗な胴体をしています。それからあとは、ほぼ同じような場所にいますけどね、ちょっと植物が多い場所だとアサヒナカワトンボという、これも綺麗な水に住んでいるそんなトンボです。

で、まあ、これが、大体ざっくり上中流部に行くと、こんなヤゴが見つかるよという。これがコオニヤンマっていうトンボのヤゴ。それからコヤマトンボ、くもみみたいな感じですけどね、コヤマトンボのヤゴ。それからこれがさっき見たアサヒナカワトンボのヤゴ。ま、この辺のヤゴが見つければ、ほぼ綺麗な川ということが言えると思います。

はい。でね、やっぱり僕はね、結構このアブラハヤという魚を指標にしたいなと思ってるんですね。イワナ、アマゴっていうのは、もう本当に岩がごろごろする溪流にいる魚です。だから、ある意味、人との距離が遠いところに住んでるんですね。ところが、アブラハヤっていうのは、割と人里が近くにあって、そして、割と川幅もそんな大きくなくて、何よりも水草、水生植物が結構いっぱいあるような場所に住んでいる魚です。しかも水が冷たくて、綺麗じゃないとやっぱりいない魚なので、このアブラハヤがわんさかいる場所、例えば、そうですね、矢作もそうですし、豊川なんかも中流部そうですけど。めちゃめちゃこの魚が多いんでね。はい。このアブラハヤと言う魚は、いい川を代表する、そんな魚じゃないかなあと思ってます。

それから、これがもうねえ、本当に減っちゃったんですよ。カジカ、ドンゴ、アカザ。これもう、ちょっと僕の中ではもうトリオなんですけどね。カジカはいない。ドンゴなんてね、もう昔は当たり前にはたはずなんですけど、本当に最近なかなかとれなくなった。アカザというのも、絶滅危惧種に指定されてますしね。こういった当たり前にいる魚がやっぱり少なくなってるなあという。彼らはそのあんまり群れでいる魚じゃないんですね、カワムツやアブラハヤというのは群れでいますけども、彼らはそういう魚ではないので、より減少が目立つといいですか、そんな気がします。

で、もうちょっと下りてきますね、もうちょっと下がってくると、魚の層はこんな感じですよ。カワムツ、オイカワ。これこの2種類は、ほぼ同じような場所にいますけども、カワムツの方が水草を必要とします。オイカワというのは、石がゴロゴロしているだけの川でも十分。だから、名古屋市内の堀川の上流だとか、名古屋市内でも結構目立つ魚ではありますけども。そうですね中流部を代表する魚。ただ食べてみるとですね、カワムツよりオイカワの方がおいしいですね、似たような魚なんですけどね。ちなみに、僕、なんでも食べてますんで。またその話は後ほどしたいと思います。

それから、やっぱり長良川を代表するアユですが、やっぱりねえ、一般の方に綺麗な川にいる魚と言えば何って聞くと、大体まず返ってくるのはアユです。アユって必ず。アユはね、やっぱり清流のシンボルなんですよ。ところが、実はアユというのは、比較的汚れた水域で

も十分遡上して来る魚で、ちなみにこれほどここでとれたアユかという、この後ろに写っている名古屋市内の山崎川という川です。はい。山崎川も毎年アユは遡上してくる。庄内川も遡上してくる。春日井の地蔵川なんてそんな川にもやってくるんですね。なので、比較的汚れたところでも見つかる魚なんだけど、ただ、やっぱり大事なのは美味しいか美味しくないかですね。やっぱり、綺麗な川のアユじゃないと美味しくない。コケが悪いわけだからね。うん。こういうところの山崎川のコケはちょっとあんまりよくないんでね、美味しくないですね、はい。いろいろ食べてます。ただアユが見つかるとうれしいですね。やっぱり名古屋市内山崎川にアユが見つかった時はうれしかったです。はい。

さあ、そして、これがちょっと厄介な生き物なんですけど、ニジマス。これがねえ、もうどこの川にも定着しててねえ。やっぱり何で定着するかっていうと、愛知の場合はやっぱり釣堀ですね、マス釣り。で、そこから逃げてしまったものがやがて定着する。それから、静岡なんかだとやっぱり養鱒場が結構ありますんで、そういうところからの逃げてしまう。

で、これに関してね、やっぱその養鱒場なんかは、いや、大丈夫ですって言うんですよ。

ニジマスは一代で死に絶えるとか、生態系にそういう、影響は及ばさないって言うんですよ。じゃあ、何食ってるのっていう話で。肉食ですから、及ばさない訳がない。魚ももちろんですけど、やっぱり水生昆虫を捕られます。ニジマスが多い水域に行くと、どれだけやってもヤゴが取れないとかね。はい。そういう現象が出てます。さらに稚魚が見つかってますから、当然繁殖もしてるわけで。このニジマスは本当厄介ですねえ。で、何が厄介かって言うと、ブラックバスとかブルーギル、アカミミガメなんていうのはもう商業的価値がない。ま、釣りの価値はあるけれども、商業的価値がない、お金にならないってなった時点で、害魚になるんですね。外来種、駆除しようってなるんですね。ところが、ニジマスに関しては、非常に商業的価値が高くて、相変わらず、ずうっとそれが続いている。これなんでかっていうと、僕たちが回転ずしで食べるサーモン、これニジマスですから。ニジマスを海で蓄養したものが、我々が食べる回転ずしのサーモンになってるわけなんで、やっぱその商業的価値が高いということが駆除されない理由の一番の理由ですね。もう静岡の富士宮市なんてのはもう市の魚に指定されちゃってるぐらいでね、ちょっとそれはさすがに外来魚を恥ずかしいだろうと思うんですけど。静岡の人でもニジマスを外来種ってこと知らない人いっぱいいますんで。はい。ちょっとこれ名前を変えるべきですね。せめて、レインボートラウトぐらい言った方がいいんじゃないかなと思いますけどね。

それから、あとはだんだんもう中下流部に行きますけども、厄介なのはまずこのコイね、コイですねえ。これでも、やっとなんか放流なくなりましたよね、そんな感じしませんか。もう僕たち、水辺研究会でもずーっと放流やめようやめようやってきたんですけど、ここ数年前ですね、やっとなんか放流がなくなりつつある。これはテレビ東京の池の水全部抜いてみました、あの影響も大きいんですけど、池の水抜いてみたで、コイを外來魚扱いにしてくれたんですよ。あれで、え、コイって外來種なんだっていうのがちゃんと定着してきた。それまではね、本当にね、コイは良きパートナーみたいな感じで、めちゃめちゃ放流されてきましたね。はい。

それが、やっとなんか最近、外來魚って扱いになって、昔よりは良くなったかなという気がしますね。当然もう、ばくばく何でも食べてしまうので、まあ、本当に山崎川のコイも凄いですけど、一番凄いの、岩倉の五条川のコイね。どれだけ太ってんだってくらい太ってま

すよね。相変わらずですねあそこはね。

それからあと、カダヤシですね。カダヤシもまあ、そうだなあ、やっぱりこれカダヤシだよって、ここが尻びれが尖ってる、尻びれがうちわ型してるのはカダヤシだよってというのはちょっと学校で教えた方がいいですね。メダカじゃないよってという違いをね。なぜかっていうと、カダヤシって知らずに捕まえてきちゃう子がまだいるんでね。これ特定外来生物ですから、家で買うと法律違反ということになりますんで、その辺は大人が教えるべきかなあと思っています。厄介なのはこの三つは、ね、この二種類は汚れに強いということですね。

さあ、では、ちょっと途中で切れてしまいましたけど続きをごらんください。庄内川、今度、岐阜県の瑞浪市に入ります。瑞浪市役所周辺はこんな感じですよ。あの岐阜県は土岐川っていう名前と呼ばれています。愛知県に入ると、庄内川になるんですけどね。この辺りは見た目も、外から見た感じも、比較的綺麗で、ケースで水をすくってみても、ほぼ透明に近いと。はい。それから、甲殻類もたくさんいて、エビがたくさんいるというのはやっぱり良いことですね、水質の浄化もしてくれるし、他の生き物のえさにもなってくれる。はい。で、やっぱりこうカワムツやオイカワの稚魚なんかもたくさんいるそんな場所でした。

はい、恵那で生まれて、そして瑞浪を通って、続いて今度、多治見市です。はい。多治見の市役所の周辺。この辺りだと、周りに結構建物なんかもあるんですけども、だけど、まあやっぱりね、綺麗なんですよ、水は。ここでも、こうやってクリアケースで見ると、うん、透明度は高いと言えるんじゃないでしょうか。水の中を見てみても、もちろんこれは水深が浅いところですからね、透明に見えて当然なんですけども、それでも多少濁ってはいるけれども、これくらいだったら、いいかなあというぐらいのそんな透明度だと思います。この辺りはね、さっき言ったアカザって言う絶滅危惧種なんかも生息している場所です。

さあ、そしていよいよ名古屋市に入ります。はい。もう、この辺りは庄内川と呼ばれております名古屋市守山区吉根という辺りの周辺ですけども、この辺はね、まだね河畔林があるんですよ。はい。で、こういうワンドになってるわけですね。そうすると、本流じゃなくワンドがあるってことは、水生昆虫だとかそれから稚魚なんかが育つことができるので、これはね非常に大事な場所だと思います。本流とは別のワンドができています。そして、周りに河畔林、水草が多い。

で、こっから汚れます。これ庄内川の右岸です。下水処理場があるんですね。で、このあたりをね、歩くとねえ、これ八田川という川が流れてきてますけど、ここはね、本当にちょっと気持ち悪くなる。空気を吸ってるだけで。においがきついんですよ、このあたり。これ、ちょうど八田川っていう川が流れ込んでくるんですね、庄内川に。で、ここに下水処理水、下水処理水はね、当然、高度に処理をされてますけど、工場排水が入り込んでるんですね。これなんですよ問題は。で、それが庄内川に流れ込んでいく、そんな場所です。

ところが汚れに強いのはこういうやっぱりね、アカミミガメはもう、どんな汚れにも耐えちゃう。塩分にも強いですからねえ。そしてコイですね。コイも本当に汚れに強い魚なんで、平気で悠然と泳いでました。ただ、この処理水というものをちょっとご覧いただきたいんですけども、これパルプヘドロがものすごく混ざっているのがわかるかと思いますが。こんな感じで、もうヘドロが沈殿してしまっているんで、歩くと、ウワーッとヘドロが巻き上がるという、そんな状態ですね。かき回すとね、えらいことになるんだこれ。こんな感じになり

ますね。すごいでしょ。

ヘドロが溜まってんだけど、水の中をちょっと見てみると、これ、さっきの土岐川と比べてください。おんなじ川ですよ、これ。おんなじ川でここまで色が違う。何も見えないですよ。これが、ちょうど、工場排水の真下の部分。で、今度、足でかき回した後にカメラを突っ込んで見るとさらにすごいです。こんな感じです。これ、もうさっきもちょっと言っていたけど、パルプヘドロね。パルプヘドロ、パルプってことはおわかりですよ。はい。僕らもね、その製品使ってますから、あんまりこう悪口は言いたくないですけどねえ。ここにある工場がそうですね。これ、ちょっと映っちゃってますけどね。

うーん。こういう状態なんですね庄内川という川はねえ。ここまではねえ、比較的綺麗なんですけどねえ。これが八田川です。これ、見ていただくとわかりやすい場所だと思うんです。ここに、ちょうど、三つの水源があるってことですね庄内川本流プラス、八田川と下水処理・工場排水。これが混じりあってる、そんな場所で、ご覧いただくと、手前が黒いのがわかりますよね。はい。本流の方は黒くない。手前の方が黒い。ここまでくっきりと水が分かれています。で、この先に、堀川の導水口があります。はい。で、この堀川の導水口に入っていくのはさっきの黒い水です。まあ、堀川を綺麗にというのは、もう我々名古屋の人たちですね、もう本当に昔からのね、悲願でありまして頑張ってもらっしゃる方たくさんいるんですけど、でもこの水が入り込んでいる以上、なかなか綺麗にならない、はい。堀川を綺麗にするっていうことは庄内川を綺麗にすると、そこに結びつけないと意味がないということだと思います。

というように、やはり川を汚しているのは人の営みであると、これが結論ではないかなと思います。

じゃあ、最後になりますけれども。今日は、川は楽しいってことですからね。楽しい話をして終わりにします。はい。番外編、川の恵みをいただきます。僕が美味しいと思う川の生物ベスト5。これ独断ですから、僕の。僕が美味しいと思うんですね。じゃあ、見ていきますよ。

いきます、第5位。アメリカナマズ、チャネルキャットフィッシュ、これ矢作川に多いんですよ。矢作川の漁協はこれをもう何とか取って食ってくれて言ってるんですけど、これね、めっちゃめっちゃ美味しいです。これちなみに、フライにして食べるのが一番おすすめなんですけど。アメリカなんかのね、南部の方のね、ハンバーガーのB級バーガーはこれ使ってます。めっちゃめっちゃモチモチしててね、美味しい外来種ですね。外来種ですから外来種を食べて減らそうっていうのは、ずっと昔からやってるんですけども、もう TOKIO より前からやってますから。向こうのほうが昔なんですよ。その一つだと思います。

それから、第4位、モクズガニ。美味しいですからね、これから秋になるとね、このちょうど、これ結構子供たちがなかなか覚えられないんですね、みんなモクズガニと覚えているんですよ。これなぜかと。これモクズじゃないのよ。これはハサミのところに藻屑のようなものが付いているからモクズガニだよって言うんですけどね。なかなか覚えられない。でも美味しいカニですね。ちなみにこれは高級中華料理店に出てくる上海ガニとまったく同じ種類ですから美味しくないと。このモクズガニはね、本当に美味しいカニですねえ。

続いていきましょう、第3位にちょっとアユを入れさせていただきました。アユが1位に



なっちゃうとね、いや今日は長良川のイベントだから付度だろうって言われるんで、あえて第3位にしといたんですけど。当然アユだけじゃなくて、イワナやアマゴなんかも美味しいんですけどね、塩焼きも美味しいですけど僕はこうやって、いつも毎回毎回薫製を作っていたんですけどね。薫製にしたら美味しいですね。ただやっぱりアユは川によって味が違いますんで、やっぱりこう、どこの川でどの流域にいたアユか、つまり、そこにどんな苔が生えているかというのがもうすべてだと思いますんでね。川によって味が違うということも確かだと思います。

第2位。なに？これはいいでしょうか、川の生物に入れてね。川の生活が長いですからね、日本ウナギ。まあね絶滅危惧種になってしまったんで、僕も最近はやっぱね、天然のウナギはもう食べないことにいたしました。やっぱ天然のウナギを僕が食べちゃうと、自分1人の腹しか満たされないけど、それがね、フィリピンの方までずっと泳いでってたくさんの子孫を産んでくれたら、もっともっと増えるかもしれないと思うとね、もうちょっと天然のウナギはもう今は食べられない。ちなみに、天然のうなぎより僕は養殖のうなぎのほうが美味しいと思います。なぜかというとな、天然のウナギはね、美味しいけどやっぱ身が皮がかたい。養殖の方が食べやすいですし、脂がのってますからね、もう十分じゃないでしょうかね、一色のウナギでね、これ第2位。

いきます。第1位。何だと思いますか、まだ出てない美味しい魚。これは食べたことある人が何%いるかな。食べたことある人は、そう、それ！ってきつと言ってくれると思います。いきましょう。第1位、アユカケです。個人の感想ではありますけど。これアユカケ、これ塩焼き、唐揚げそれから煮付け、あとアユカケは、海のカサゴに非常に近い魚なので、刺身が美味しいんですよ。カサゴの刺身ってめちゃめちゃモチモチしてるじゃないですか。もうそれとほぼ食感同じ。川魚で、刺身、塩焼き、煮付け、唐揚げ、全部いける魚ってまずないですから。そういう総合力によっても僕がアユカケ。これが1位です。ただアユカケはですね、本当に数が減りました。もうちょっとした堰堤に登れなくなってしまうんでね、やっぱダムができたらもう終わりです。そうですね。なかなか、当然生息してますし庄内川にもいるんですけど、やっぱ福井あたりがね、有名で、ちなみに、これは福井のある料理屋さんで食べたアユカケ。一匹いくらすると思いますか。2,000円です、2,000円。これだけで1万円以上でしょ。それぐらい今養殖はまずしてないのでね。養殖も難しいですから、ちょっとかつて食べられない状況があるんですけどね。それでも美味しい魚なんで。もっともっと増えてほしいなと思います。僕、今日あえて食べる魚の話をしたのは、やっぱり川を守る、川をきれいに、そのためには一番大きな原動力は、遊んで楽しい川づくり、そして食べて美味しい魚を増やす。美味しいものが取れる川、それを大事にしたいなと思いますからね。そういう意味であえて食べるというものをテーマにしてみました。

これ最後ですがちなみに意外と美味しい編ということで、いろんなものを食べました。これ在来種からいきますと、このトビゲラやカワゲラね、これが美味しいです。ザザムシと言ってね、長野では貴重なたんぱく源です。さっきのヘビトンボの幼虫も大変美味しい。それからアメリカザリガニは当然甲殻類ですからね、美味しい。スクミリンゴガイ、ジャンボタニシ、これはねもうやめたほうがいい、食べるのは。もうね、汚い田んぼにしかないから。こいつ自体は、身は悪くないけど、もう田んぼの化学肥料や農薬まみれの味だからやめたほ

うがいい。あとカダヤシ。これはかき揚げ、くっそまずい。これやめたほうがいい。あのね、苦いんだわ。カダヤシって。汚れたところにいるでしょ。苦いわ。臭いわ。これはもうおすすめしないですね。おすすめしても食べないと思いますけど。あとはカミツキガメ、これは美味しいですね。そして最後にミシシippアカミミガメで、これは鍋にして食べてみましたけどね。非常に鶏肉の味がしてね、手足のつけ根の部分と内臓の位置が食べられるんですけどね、何よりもね、このスープのお出汁。これはですね、スッポンのスープとほぼ同じような味がしてですね、めちゃめちゃ美味しいですよ。これはもうぜひ、ねえ、アカミミガメは生態系をかなりめちゃくちゃにしておりますんで、今日ここに来ていらっしゃる皆さんが1人1匹ずつ食べてくれればそれだけで減りますんでね。ただ単に殺すだけじゃかわいそうじゃないですか。人間がちゃんと人間の責任のもとに食べて天国に送ってやるということで、1人1匹ということですのでよろしくお願いします。

というわけで最後は食の話をしていただきましたけれども、自然は楽しいな。だからこそ守りたい。自然は美味しい。だからこそ守りたい。今日はそんなお話をさせていただきました。最後まで皆さんありがとうございました。

(原田委員)

ありがとうございました。鉄崎さんのお話はわかりやすく面白いですね。そして、体を張ってますね。

(鉄崎氏)

いや、これは無理してやっているわけじゃなくて、食べたいと思って食べてるから大丈夫。無理やりさせられてないから大丈夫。

(原田委員)

川のを全部食べる、食い尽くす、試し食べるってことですね。

(鉄崎氏)

いろいろ食べてみる。

(原田委員)

すごいなー、チャレンジャーだなー、やっぱり川を愛するのは好奇心と遊び心と、美味しい、楽しいが大事ってことですね。

(鉄崎氏)

潜ってきれい、魚がいっぱいいる、そして取って食べて美味しい、こんな幸せなことはないと思うんで。僕の自然保護の原点はそうです。

(原田委員)

かっこいいですね。

(鉄崎氏)

でもそうじゃないですか。

(原田委員)

今日は後ほど1時間、パネルディスカッションがありますから、あとでたっぷりとお話を聞きたいと思います。どうもありがとうございました。

(鉄崎氏)

どうもありがとうございました。

(原田委員)

鉄崎さんも、川を愛し、川に生きる男ですけれども、ここで皆さん、私たちの委員であります大橋さんという方、いつも講座でもご登壇されたり、委員会に出てくださいたりしていましたが、その大橋亮一さん、昨年亡くなりました。皆さん、悲しい思いをされている方たちも、お葬式でも悲しい思いをしました。大橋亮一さんは長良川に生まれ、長良川を愛し、長良川で川漁師として一生を過ごされて、本当に正直に、尊い活動をされていた方で、一番おしゃべりがばばちい川になってまったって言っていて、生粋の名古屋弁でお話をされ、なんとか川をきれいにしたいという思いで委員をお役を務めてくださっていました。

ばばちい川をなんとかしたいという大橋亮一さんの思いをビデオにまとめさせていただきました。このビデオをまとめてくださったのが、映像制作作家の、新村安雄さん。彼もこの委員会で、今日は、ご欠席なんですけど、長く大橋さんを取材されて、その映像となります。それではご鑑賞ください。

**【追悼上映「長良川に生きる。川漁師・大橋亮一」(映像制作：新村委員)の上映】**

(原田委員)

ありがとうございました。追悼上映「長良川に生きる。川漁師・大橋亮一」と題して、映像は新村安雄委員が製作してくださいました。ご冥福をお祈り申し上げます。大橋さんの思いを私たちは受けて、この委員会でも引き続き長良川河口堰と向き合っていかなければと思います。

さて、ここからは若者にバトンを渡していきますけれども、前回の委員会の時には、なかなかインパクトのある発言をしました。ぼくたち絶滅危惧種ですと。川で遊ぶ子供たちが絶滅危惧種なんですよ、なんて面白いことを言っていただきました。今井洸貴君にお願いしたいと思います。大学で生物の研究をしており、サークルで活発な活動をしております。しじみのTシャツがインパクトあります。SDGsのバッジもちゃんと付けていますね。じゃあ、今井洸貴君にここからはお願いしたいと思います。

(今井君)

皆さん、こんにちは。名城大学の方に通っております。4年生をやっております、今井洸

貴と言います。結構、しじみ君とかしじみ先輩といろんな人たちに呼ばれてるんで、今井洗貴ではなくて、しじみ君とだけ覚えておいてください。

私ですね、三重県の桑名市、もっと言ってしまうと長島町ですね。長良川河口堰が常に見えらるくらいところに住んでおります。ですので、小さい時から親の影響とかもあってですね、生き物が好きだったということで、時間があつたら、ちょっと川に行つてハゼとかね、そういった魚を釣つたりとかして楽しんできました。

ということで、この今やつてる生き物好きなのは、長良川ゆずりもあるんじゃないかというところで、長良川に育てられた1人の男の話と題しまして、ちょっとお話ししていきたいと思つています。そんなに堅い話ではなくて、単純に何が居るのかとかそういった話なんで、気軽に聴いてください。

私ですね、はじめましての方も多つと思つていますので軽く自己紹介なんですけど、どこにでもいる一般的な大学生です。特にその中でも、偶然、環境保全活動に興味を持ってちょっとかじつたかなつていう感じの普通の大学生です。でも、高校の時もですね、こういった活動をいろいろやつておまして、名城大学付属高校、庄内川のすぐ隣にある高校なんですけど、そこに通つておまして、庄内川流域の春日井のあたりから藤前干潟まで広く調査を行つて参りました。こんな感じですね。ちょうど庄内川から高校を望んでいる写真になりますね。

先ほど鉄崎さんがおつしゃいましたように藤前干潟でいろんな生き物を食べて、味から水質を考えてみたりですとか、あと、金城ふ頭ですね。あのあたりから、4日間ぐらいかけてずっと川の隣を歩き続けて、いったい庄内川にはどうつ堰があつて、川にどうつ障壁があるのかなつというのをずっと上つていきました。なので、先ほど映像にあつた川の合流地点ですね、あそこも本当にいるだけで地獄のような感じだつたんですけども。あそこにいるアユも実際食べてみたんですけど、いろんな味がするんですけど、そういったのも経験しております。

で、こちらは愛知県だけにとどまらず、九州の有明海の方にも通つて生き物の調査をしておりましたので、その時のやつですね。胸のあたりまで泥に浸かりながらいろんな生き物、ムツゴロウとかを追いかけています。

そして今ですね、大学になつてですね。名古屋でなごや生物多様性センターさんの方にもお世話になつておまして、池の水を抜いたりですとか、絶滅危惧種、特に今写真に出ております、カワバタモロコという、愛知県では絶滅危惧一類に指定されてつて、本当にごくわずかとかついうか、数は居るんですけど、ほんとに局所的にしか居ないつてつう。その場所がなくなつたら終わりですね。そういった、希少な生き物の保全で、今、卒業研究もやつております。

では長良川ですね、こんな感じの、ナガシマスパーランドの汽水のポイントであつたりとか、河口堰の上流側。淡水の状況ですね、そういったところ、いろんなところで釣りとか、網入れて魚を捕つたりとかいろんなことをしています。

長良川河口堰ですね、ここからどんな川なのかつてつうのをお伝えしていきます。まず長良川の河口堰の下の方、ナガシマスパーランドの方ですね。そつち側の方ですね。淡水と海水が混ざつている汽水域といった所になつてます。こういった所はですね、川からの栄養が入つてきたりですとか、砂地が広がつたりとかで、ゴカイだつたり、いろんな生き物の餌

がたくさんあります。ですので、いろんな生き物が集まりやすい所になっているのではないかと感じています。特に淡水と海水が混ざってますので、海の生き物と、川にいるような生き物が両方見られる所になっております。

特にですね、先ほどアユとかサツキマスとか、そういった話もありましたが、季節によって姿を見せる生き物というのは居ます。ですので、一年中通っていても飽きないような、そんなすばらしい所になっています。先ほどからもずっと申し上げていますが、そんな感じでいろんな生き物、多種多様な生き物が見られるよという環境になっています。

では、こちら去年ぐらいからやり始めたやつなんですけど、長良川河口のまずは春の生き物ですね。まずこちら、これはカレイですね。こういった春先ですね、4月とか、大体桜が咲いてツバメのやってくるぐらい、それぐらいになると、こういったカレイが出てきます。このカレイ、偶然かよくわからないんですけど、体の半分しか色がついていない透明なやつだったんですけど、こういったカレイがたくさん捕れます。続いて、ギンボという魚ですね。こちら、江戸前の天ぷらですとか、そういったところで高級な食材とか、おいしい食材として知られている、結構、海の方にいる魚なんですけど。こういったのもですね、流れ着いているゴミだったりとか、牡蠣殻といったところに身を潜めて、住んでいます。続いてこちら、ギンボと同じような所にいるガンテンイシヨウジ、ヨウジウオという魚なんですけども、そういった魚もいます。結構変わった形でなんか細い。体も硬いんですけど、そういった感じの、あまり見ない魚も実はいたりします。続いてこちらですね。先ほどから出てきましたアユですね。これもだいたい桜が咲くころにはこれぐらいの、割と大きなアユが大量に遡上してきます。続いてこちら、先ほどめっちゃめっちゃ美味しいと言われていたアユカケです。こちら海の方に下りてきて卵を産むんですけど、それが育ってきて、川に登っていく。その段階で、体力を付けるために餌を食べなければいけないというところで、こういった干潟とか汽水域で身を寄せていることが多いです。特にこのアユカケもタモ網で一回すくったらこれぐらいのサイズからもっと小さいサイズまで5~6匹入るような、結構な密度でいるような所です。続いてこちらサツキマスですね。こちらも、朝方とか行くと、ボラとかアユの群れを追いかけて水面をバシャバシャやっています。こんなサツキマスですね。最近は場所も有名になっちゃって、魚よりも釣り人の数の方が多いんじゃないかと思うぐらい、結構人がいますけど。春にやってくるとこういった魚が見られるようになります。

続いて夏ですね。丁度今ぐらいですかね。こちらスズキですね。まだまだ小さいサイズにはなるんですけども、いろんな魚とか、小魚、ボラの稚魚とか、そういったものがいっぱいいますので、そういった餌を求めて集まってくるんじゃないかと思います。続いてこちら。ちょっと小さいんですけど、サヨリですね。こういった海の魚とかも、長良川の河口堰のすぐ真下のテトラ台なんですけども。そういった所で、特に夜ライトを照らしていると、細い魚がシャシャシャと泳いでいるので、それを捕まえてみるとサヨリだったりします。他にもですね。これ、先ほどの河口堰下のテトラ台なんですけども、ライトで照らしてみると、ハゼ、ウロハゼというちょっと大きめなハゼなんですけども。そういったハゼとか、テナガエビが岩の上やテトラポットの上を歩いているところが見られます。こんな感じで、特に夏の今の時期ぐらいですかね、沢山の生き物が見られる楽しい時期になります。さっき出てきたやつはみんな食べたことがあるんですけども、おいしい魚たちですね。

続いて、今から台風が多くなったりとか、雨が降って川が増水しやすい時期になってきますので、そういった後はちょっと変わった、変わったというかあまり見ないような魚も出てきます。これオオクチバスですね。ブラックバスっていう魚です。こちら上流の方には結構いるんですけど、船頭平閘門だったりとか、そういったところには結構いるんですけど、増水すると流れてくるんだろなというものもありますね。続いてこちらギンブナ、フナですね。こいつらはちょっと塩分には耐性があるので、1年中いないとは言い切れません。ハゼとかの釣りをしても、こいつらが結構釣れたりするんで、割と海水にも耐性がある。特にコイもそうですね。そういったものがあります。これ一番びっくりしたんですけども、23号線の下あたり、結構、ぺろっと舐めてみてしょっぱい所にいたんです。カマツカです。こちら増水して流れてきたんでしょうね。僕も通っていて初めて捕ったんですけども、こんな驚くような、淡水にいるような魚も河口堰の下には、増水すると落ちてくるんだろなということが見てわかりました。

続いてここから、秋の方ですね。こちらマゴチっていう魚なんですけど、ハゼとかが少しずつ大きくなってきますので、そういった餌を求めて。マゴチやあとヒラメ、こちら23号線の下あたりで釣れました。結構そういった魚を追って入ってくるんだなということもありますね。特にナガシマスパーランドのあたりから100m前で、一回サワラっていう魚が入っているのを見たことがあるので、結構魚が集まりやすいんでしょうね。他にも鳥ですね。こちらコサギという鳥です。コサギって体が小さいんで、小さい魚しか食べられない。大きな魚ばかり増えてもだめな生き物で、特に小魚が集まりやすい干潟とか、そういった所が貴重な餌場になっています。これはカレイを捕まえて食べているんですけども。こちらはミサゴですね。猛禽類、ワシとかそういったあたりになってくるんですけども。これは魚も食べる猛禽類なので、ボラとかそういったものを上から襲って食べる奴らが結構見えたりします。他にほ乳類ですね。写真がなくって申し訳ないんですけども。タヌキですが、夜釣りをしていると後ろを走って行きます。続いてこちらキツネです。これ、家で寝てたりすると、犬みたいな鳴き声で、結構な数が外にいます。続いてこちらイタチ。これも釣りをしていると、魚を狙っているんでしょうね、後ろをチョコチョコ走ってたりします。

そういった河川敷ですね。これが航空写真で、この2本の線が線路なんですけども、そういったものを見ていただきますと、連続している。例えば道路が入って分断されていないとか、あんまり人が入り込まないとか、そういった環境です。後、草地や葦原が連続している。そういった所です。そういった所は生き物が通りやすくなっています。鳥とかも身を隠しやすいですし、先ほどのタヌキとかも日中は出てこないですけども、身を潜められるようになっています。そういったのを生き物の通り道ということで、エコロジカルコリドー、生態学的な回廊っていうんですけども、そういった役割も果たしているじゃないかなと思います。

長良川河口堰が出来た時、僕は産まれてませんので、僕が産まれたときには河口堰は当たり前前の存在になってました。それまでは、自由に魚が行き来できたり、汽水帯が広がったり。後、誰に聞いても、昔は魚が多かったって口を揃えて言うんですよね。そういうのを聞いているとめっちゃ羨ましくなってくる。実際に河口堰だけではなくて、他の所でも「昔はこんな風に・・・」って聞く度に、ズルイじゃないかと思います。なので、私の後輩たちはそんな

苦しいような思いをしないで済むように、ちょっとでも生き物たちのための豊かな環境作りができるように頑張っていこうかなと、こんな活動をしています。

続いてこちら。どこでもできる長良川河口堰の楽しみ方の一例です。Google 検索とか何でもいいんですけど、「長良川河口堰ライブカメラ」って検索しますと、こういった動画が出てきます。リアルタイムで配信されているんですけど、魚道観察室っていうのがあります。川から見られるようになっているんですけども、この映像と、後、魚道の中にカメラが沈んでいて、その映像が見られます。先ほど 10 時半くらいに確認した時には、こういったニゴイですとか、スズキですとかが壁に付いているカニを狙っているんだと思うんですけど、そういったのが沢山います。

さらにはコロナで、この魚道観察室が閉まっているので、人がいないんですよ。なので、生き物を見られる確率は上がっているんじゃないかと思います。

他にも、水中に沈んでいるところ、小さいハゼでしょうね。壁にくっついているんだと思うんですけど、尾びれが見えました。結構 高確率で生き物が見れると思いますので、暇な時には私はこういうのを見て生き物を感じてますので、皆様にも覚えていただけたらと思います。以上で終わらせていただきます。ありがとうございました。

(原田委員)

ありがとうございました。しじみ君は 21 歳ですか。

(今井君)

そうですね。21 歳です。

(原田委員)

うれしいですね。鉄ちゃんどうですか。こんな若者のパワーを。

(鉄崎氏)

さっき、どこにでもいる大学生って言ってましたけど、どこにでもいねーから。珍しいから、こういう人。こういう人がもっと増えてほしいなと本当に思います。

(原田委員)

鉄崎幹人 2 号に任命してもらえますか。

(鉄崎氏)

まだ早いです。

(原田委員)

今日はいろいろ教えてもらってくださいね。拍手をお願いします。しじみ君…じゃなくて、今井洗貴君でした。ありがとうございました。川の生き物と嬉々として遊んでいるっていうのが伝わってきました。ありがとうございました。

今日、皆さん、ちゃんと時間を守って発表してくださる方ばかりでしたので、少し時間が、余裕なくらいですね。まだ余裕があります。皆さん休憩時間を今から12分とりたいと思います。時間通り、休憩時間の開けは2時45分とさせていただきます。随分、今から今井君が始まるくらいなんだ。ちょっと鉄崎幹人さん前に出てきてください。今井君も前に出てきてください。何かしゃべりますか？

(鉄崎氏)

休憩を前倒しして。

(原田委員)

鉄崎さんの話を結構「巻き」でやっていただいたので。

(鉄崎氏)

そうですね、ちょっと早かったですね。

(原田委員)

だいたい、皆さん伸びるんですけど。すごい優等生ですね。やっぱりテレビ・ラジオのお仕事をされている方は違いますね。

(鉄崎氏)

時間は大事です。どうですかね。休憩を前倒しでとって、最後のディスカッションを長くしてもよいですし。

(原田委員)

今質問をやっちゃってもいいですが。

(鉄崎氏)

あーそうですね。それでいいですよ。

(原田委員)

当初、質問は最後に持つて行くつもりで、ペーパーに書いてもらうつもりでしたけれども、口頭でという方はそこに特別席が設けられているというか、スタンドが作ってありますので、そのマイクで質問をしていただくということにしたいと思います。本来ですと、一番最後に15分しか設定してないんですけど、少ないので。今日はせっかくなので、時間が20分もありますので、10分くらい、質問ある方、御発言できる方、挙手をお願いします。

委員の先生でもいいですよ。今日、委員の先生方も皆さんおそろいですので、ちょっと今までの講座とは違って、鉄崎先生のおかげで垢抜けた感じでしたと思います。

(鉄崎氏)

先生と言わないでください。



(原田委員)

鉄ちゃんね。ちょっと未だ地を出さずに、おとなしくやっていますけど、私たち一緒に歌も出していましたね。

(鉄崎氏)

そんな話はいいです。名古屋弁のラップでしょ。「だがね」っていうやつでしょ。

(原田委員)

そうですね。覚えてます？

(鉄崎氏)

30年前ですね。

(原田委員)

皆さんご存知ですか？

(鉄崎氏)

そんな話はいいから。

(原田委員)

話が脱線してしまいましたが。質問ある方、どうぞお願いします。ぜひぜひ。はい。そちらのマイクルームに移動していただいて。マイクはその都度消毒させていただいています。

(参加者)

ちょっと質問なんですけど、私、岐阜県的美濃市から来たんですけども。先ほどの工場ですかね。あそこの所の検査とか多分やっていると思うんですけど。美濃市もああいう工場が多いんで、おんなじ状態のところは板取川、長良川の支流の板取川にあるんですけども。なぜ総量規制ではなくて、濃度規制とか未だにそのままなのかがよくわからないんですけども。

(鉄崎氏)

僕も同じ、「なぜ？」って思っているんですよ。どうしてあんなのが許されるのかって思うんですけども。でも許されているのが現状なんです。しかも「優良」くらい言われています。

(参加者)

もう一つ、不思議に思っているのは、美濃で検査してるって言うんですけど、採取場所が相当下流なんです。それで質問状を出したら何も回答がない。

(鉄崎氏)

そうですね。本当はあそこでやってほしいですよ。ただ、あそこでやると多分CODが100くらいになっちゃうんですよ。バーンと出るんですよ。それが希釈されて、ずーっと庄内川河口までいきますけど。藤前干潟ですとかでシジミを採って食べると、あそこの味がするんですよ。するんですよ。もう何採って食べてもそうです。それはもう、やっぱり、希釈はされてるんだけど底生生物には完全に体内濃縮されるってことなんで、結局は同じですね、どこでやっても、あれより下は。

(原田委員)

でもそれ、流す廃水に規制はかけてないんですか。

(鉄崎氏)

規制はあるんですよ。あるけど、それはクリアしている。クリアしているってことなんで、もうどうしようもないですね。

(原田委員)

県の職員さんがいるから聞きますか？

(鉄崎氏)

聞いてください。ぜひぜひ。

(原田委員)

職員さんで答えられる方がいらっしゃったら。その規制はどんなもので、環境に対してどうかっていうことを聞いても大丈夫ですか？何か答えることができる職員さんがいたら、是非教えてほしいですよ。

(鉄崎氏)

教えてほしいですね。「あれでいいのか」ってことは僕もずっと昔から。まあ、ずっとそれで争われてきたんです。

(参加者)

自分たちで採取して、検査場持って行くと、受けてくれないんです。

(原田委員)

多分、県で検査してるんですよ、水質を。

(鉄崎氏)

県なのか？もしかすると県じゃない？

(原田委員)

どうぞ。お願いします。

(事務局)

御質問いただきましたけども、我々、今日は利水ということで、利水関係課の水資源課ということなんですが、今日事務局をやらせていただいています。そちらの規制の方の担当は、当然こちらには来ていないものですから、お答えできる者がいないということで、申し訳ございません。

(鉄崎氏)

極めて簡単な質問なんですよね。「あの水でいいんですか？」ということだけです。あの排水でいいんですかって。

(参加者)

それが大丈夫だったら、あなたの子供に飲ませられますか？それだけなんです。原爆症の時もそうだったんですけど、問題無いっていう厚生省の発言をした人に、「じゃ、このチョコレートを食べてください。」って言ったら、「私の子供には食べさせられません。」っていう回答だったんです。

(原田委員)

それじゃいけないですもんね。

(参加者)

川の生き物を食べれるような、きれいな川にしようとしらないのか。

(鉄崎氏)

庄内川には漁業権がないからね。また、そこが問題なんです。漁業権を捨ててしまった川は死んでしまいますよ。やっぱりね。

(原田委員)

そういうこともあって、数値がそれでいいのかなっていう話になっているかもしれないですね。

(鉄崎氏)

漁協がないっていうことは大きいことです。

(原田委員)

鉄崎先生が、このように言ってるじゃないですか。10年言ってきた。それで何か変わったんですか？

(鉄崎氏)

何も変わらないですね。今日、敢えて庄内川にスポットを当てたんだけど、なぜかという  
と、長良川っていうのは河口堰の問題があるから、国が目を向けているんですよ。それから、  
こういう NPO だとか保護する方、それから川漁師さん、あのような方がいるので川と人が繋  
がっているんですよ。ところが、庄内川は漁業権がない。しかも、名古屋のずーっと北の端  
を通っている、海まで。さらにもう一つ言うと、名古屋市民は木曾川の水を飲んでいる。木  
曾川の水を引いてきて飲んでいるので、極端に言うと、庄内川がきれいだろうが汚かろうが、  
何にも生活に関係ないんです。ここが一番大きい問題だと思います。きれいにならない、豊  
かにならない一番の原因はそこだと思います。

(原田委員)

今日は新しい気づきを貰いました。庄内川の話から。でも、しじみ君みたいに長良川の河  
口のあたりに住んでいる立場から。

(鉄崎氏)

しじみ君が毎日庄内川で泳いでいればいいんだよ。毎日泳いで、もっと目を向けさせない  
と。

(原田委員)

どう思いました？しじみ君。鉄崎さんの庄内川の川の汚れ？汚れて言っちゃった。

(今井君)

僕が通っていた付属高校の部活動があって、水質の検査だったりとか生き物の調査をやっ  
ていて、庄内川の所属高校の横だと結構干満が差があって、色々な生き物が入っているん  
ですね。特にアユカケとかセミカジカとか、2年くらい前だと一匹サツキマスが出たらしくて。

(鉄崎氏)

ああ庄内川ね。出ましたよね。出た出た

(今井君)

庄内川でだいぶ研究していたこともあるので、あの辺もちょって見ているのですが、や  
っぱり昔の資料の写真とか見ても皆さん泳いでいたりするんですけど、今はそんなことし  
ていたら、だいぶやばい目で見られたり。そんなような状況ですので、人と川の距離です  
かね、生き物や自然を守る上では興味を持って貰う上では一番重要じゃないかなと思う。

(鉄崎氏)

庄内川で遊んでいる子供は一人もないからね。

(原田委員)

遊んだら怒られるとか？

(鉄崎氏)

遊ぶ場所がないというのと、うん？

(原田委員)

降りていけない？

(鉄崎氏)

山崎川みたいな、あいいう親水広場があるとかでもないし、ほどよい川幅であれば良いですけど、やっぱり危険度もあるし、もちろん探せばあるんだよ、魚がいるところは。だけど、だれも遊んでいないよね。

(原田委員)

そんな中で鉄崎先生は入っていくんですね。

(鉄崎氏)

ぼくは魚好きなんだよ。やっぱり。

(原田委員)

研究者はね。

(鉄崎氏)

研究者というか、ただの遊び好きなんだけど。いろいろ居るんだけどね。

(原田委員)

いろいろね、胃袋も頑張ってくれているわけじゃないですか。食べて。しじみ君ちょうどでてきたのが、アユカケというのが捕れるんだよって言うけど。あれ売ったらいいんじゃない？

(今井君)

小さいです。

(原田委員)

料亭で高いと言っていたから。

(鉄崎氏)

アユカケは25cmくらいないと。ちょっと。

(原田委員)

しじみ君が捕ってくるのはちょっと小さいと、商品にならない。

(今井君)

小さいですし、そういったお金が儲かるというのを見てしまうと、僕たちだけでなく他の人も…。

(原田委員)

冗談だから。もういいねえ、こういうのね〜。たしかにね、すぐ人が集まっちゃうもんね。生物多様性が崩れちゃうもんね。じっとそっと小さい動きで見守ることが大事だね。

(今井君)

生態系サービスはみんなのものですからね。

(原田委員)

すばらしいね。質問、あと1個頂いて、なければ休憩に入っちゃおうかなと思います。質問があったらどうぞ。あとはアンケート用紙に書いて頂いてもよろしいです。委員の中から今日は、鈴木先生、伊藤先生、武藤さん、富樫先生、蔵治先生っていうことで。あ、下向いて。先生方もご意見ご感想ありましたらここでお願いします。後で時間がないかもしれませんから。伊藤先生お願いします。一色のウナギの話ができましたね。

(伊藤委員)

どうもありがとうございます。書いちゃうんですけど、鉄崎さんがずっと川と付き合っていて、鉄崎さんの川との付き合い、10年、20年、30年くらい、その中で、川は良くなっているのか何か問題があるのかっていうのをちょっと聞いてみたい。

(鉄崎氏)

この後のディスカッションで出ると思うんですけどさわりだけ。僕は昭和39年生まれです。高度経済成長期とともに小学生時代を過ごした。たぶん一番汚かったころです。その頃に比べたら川は今、断然きれいです。じゃあ、生物種数、生物数は増えているか、決して増えていないですね。むしろ、汚い川でかろうじて頑張っている生き物の方が多かった気がします。だから、ぼくがいつも思うのは、今の川・海と、いつを比べるのか。昭和40年代と比べてもしょうがないんですよ。やっぱり、みんな言うんですね。川はきれいになった、あのころと比べてきれいになった、ええがやこれで、と言うんです。そんな頃と比べてもしょうがない。やっぱりぼくらのじっちゃんの時代と比べたら、じっちゃん達は川で泳いで魚を捕まえて食ってたという時代があったわけですよ。比べるならそこだろうと思いますが。

(原田委員)

さっきちょうどしじみ君も言いましたが、昔がうらやましいと、そのうらやましいは昭

和 40 年代のもっと前。

(鉄崎氏)

もっと当然前だよな。後ほど、たぶんじっくり出ますんで。

(原田委員)

もう伊藤先生も出てくるかもしれないのでね。パネラーになって。お願いします。ありがとうございます。

(鉄崎氏)

今日はやりずらいです。専門家が多すぎて。

(原田委員)

今日は委員以外にも来ていらしゃる方々は専門的にこの後たくさんあって。

(鉄崎氏)

いつもはだいたい小学生の前でしゃべっているから。やりずらい、やりずらい。

(原田委員)

やりずらくなったら歌っちゃってください。映像の中でギターの心地よい音色がありますが、あれ多分ご本人が。

(鉄崎氏)

違いますね。あれは押尾コータローです。

(原田委員)

え、違うの。自分もやりますよね？今日はやらない？はい。ありがとうございます。では、ここからちょっと休憩取らせて頂きまして、45分から再開とさせていただきます。皆さん回収箱を持ったスタッフがいますので、回収箱の方に是非アンケートを書いて頂いてそこに入れて下さい。そしてまとめまして後でパネルディスカッションの後半から最後ですね、皆様の質問をまとめさせて頂きたいと思います。では、休憩に入らせていただきます。ありがとうございます。

・・・休憩・・・

(原田委員)

まず少し時間がございますけど、皆さんマスクのご準備と水分補給をどうぞよろしくおねがいしますね。ここからはですね、鈴木委員と向井委員が登壇となりますので、どうぞよろしくお願いします。自己紹介は後ほどパネルディスカッションの冒頭で披露していただくと

しまして、小島座長を中心に先ほど基調講演してくださいました鉄崎幹人さんとしじみ T シャツの今井光貴君に登壇していただきまして、世代を超えたトークということで皆さんに 1 時間お付き合いいただければと思います。もう少し皆さんお席に戻られましたら、始めさせていただきますね。ここはちょっと時間を超えそうなくらい議論が飛び交うのかなと思います。タイムキーパーからどうぞ超えないようにと言われております。アンケートの方は集まりましたでしょうか、皆さんアンケート書き終えていらっしゃいましたら、アンケート回収箱にお入れください。はじめましょうか。小島座長、もう始めても良いですね。

私、自己紹介遅れましたけど、この委員に属しております原田さとみと申します。引き続き司会進行をさせていただきます。よろしくお願ひします。ここからは、小島座長にバトンを渡させていただきます。小島座長よろしくお願ひいたします。

(小島座長)

それでは第 2 部となります。パネルディスカッションに入りたいと思います。ちゃんと自己紹介はしたかな。愛知県長良川河口堰最適運用検討委員会座長をしております小島敏郎と申します。愛知県の顧問もやっております。今はですね、東京都の小池知事が作った都民ファーストの会というところの事務総長、議員のほうの政策を担当しております。その前は青山学院大学の国際政治学部の先生、その前は環境庁、環境省に勤めておりました。その前は地元に住んでまして、先ほど出てた庄内川の上流は土岐川ということで岐阜県多治見市に高校まで住んでおりました。高校は名古屋に来てましたから、越境入学ですね。ということで、昔の話を思い出しながら、川というものがずいぶん遠くなったなと思いました。

今日のテーマは川は生きている、川はおもしろい、川であそぼう、ということです。こういうテーマにいたしましたのは、最初にお話しをいたしましたけれど、生物多様性というのは専門家だけがやるわけではありません。専門家で一生涯懸命検討し、国土交通省とも話をしてまいりました長良川河口堰ですね。しかし、生物多様性の COP15 で言われているように、物事を動かしていくには経済、社会、政治、技術全てにおいて変革が求められる、そうゆう人の力を合わせてテコの原理で今の流れを変えていかないと生態系が破壊されていく、あるいは人と生態系の関係が壊れていくということは止められないんだということでもあります。そういう意味では、研究なり専門的な検討をしてまいりましたけど、今日の話聞いていますと、やっぱり愛が足りない、そうゆうことなんだろうなと、いわゆる情熱といいますか、愛といいますか、好きというかですね。今日の話は川が好きなんだぞという話がですね、普通の大学生じゃないというところが問題だと、さっき鉄崎さんがおっしゃたように、それが普通であれば、今のようなことにはなっていないと言うことでもあります。そういう意味では、若い人あるいはいろんな人が総力を挙げて、生態系とか生き物とか付き合っていくということで、テコを動かしていかなければいけない、みんなバラバラな方向を向いていると力が分散されていつまでも変わらないということなんだろうなと、いうふうに思います。ということですね、さっきお二人の話は聞いたので、まずは紹介を兼ねて今日のテーマに沿って、鈴木先生から海について。



(鈴木委員)

自己紹介を少しさせて頂いて、今日はシンポジウムと言うことで、少し感想を述べさせて頂きたいなと思います。私はもともとは県の愛知県水産試験場に勤務しておりまして、県に入庁以来、24で県職員になりまして、60まで36年間、伊勢湾と三河湾をずっと見て、伊勢湾、三河湾の漁業者の方々と大変親しくさせて頂いたわけですが、先ほど鉄崎さんの話にもあったのですが、私は、県に入って伊勢湾、三河湾の調査をやり始めた年は49年、いよいよ高度経済成長が始まる時期で、海が日に日に変わって行くような時代を過ごしてきて、このままでは伊勢三河湾は壊れてしまうのではないかという危機感を持って、例えば私が印象に残っているのは、トリガイというのは意外と皆さん知らないかもしれませんが、高級ネタ、すしネタは実は三河湾というのは全国一位なんですね。年によって変動はありますけども、トリガイが三河湾の奥、全部死んでですね、浮いて、腐って、ガスでプカプカ浮いている姿を見たことがあります。これはものすごく衝撃的でした。それは海の底の酸欠状態がそういうことを起こしたわけですが、そういうことからですね、陸から川を通じて流れ込む窒素とかリンをもっと下げなきゃ、もっと下げなきゃと、いわゆる富栄養化対策ということで、下水道をもっと整備して、高度処理をしないと、その時は本当にそう思っていた。ところがですね、あれから20数年たってですね、今の海はどうなっているかということ、確かに海の透明度は高くなって、非常に海は澄んできたんですよ。ところがですね、依然として酸欠の状態は改善していないし、それどころか、二枚貝ですね、アサリにしろ、トリガイにしろ、他の魚にしろ、どんどん漁獲が減ってきて、今、伊勢湾の春の名物、皆さん食べられるコウナゴなんかは、6年間禁漁ですよ、アサリもですね、愛知県全国一位で全国シェア7割、2万トン越していた漁獲があったのですが今は千トンですよ、それもこの5、6年の間にそういうことが起きた。この急激な悪化は何なのかということが自分の頭から離れてならないのですが、今日、川の話の色々お聞きしたのですが、人間の関与、例えば下水道、下水道自体が悪いわけではないですよ、そういうものが行き過ぎて、また、中山間地の農業が衰退してきて、そういうところから出てくる、肥料系も含めてそうなのですが、窒素とか栄養分が川を通じて海に流れなくなっているという報告も一方ではある。それから、都市化が進んでですね、雨が降ってもそれが地下に浸透せずに表面を流れて行ってしまって、栄養をしっかりと含んだ水がじわじわと川を通じて海へ流れ出るということが、非常に近年に劣化してきた。海には矢板でどんどん海と岸を隔てる城壁ができて、皆さん、諫早の干拓の状態をテレビで見られて、水門閉鎖しましたよね、あれってじつはこの海でも、伊勢湾、三河湾沿岸みんなそうなんです。そういうふうに陸と海を分けてしまう土木工事、耐震化とかっていう名目のもとに強烈に起こっている。そういう時代の中で、この長良川河口堰の問題も海から見た長良川河口堰の意味合いということも、干渉を持っているということで、この会の副座長をやらせていただいております。ちょっと話長くなりましたが、名城大学の鈴木でございます。よろしくお願ひします。

(小島座長)

では、向井先生。

(向井委員)

岐阜大学地域科学部の教員やってます向井といいます。基本的には魚の研究をしてまして、最近、岐阜県内の自然というものをちゃんと記録しよう、ということをしていろいろやってみて、それ以外にも、生物の進化とかそういうのを、本来は研究してたんですけど、それで岐阜県内にどんな魚がどこに、どのぐらいみたいなことを研究してたりするんですが、なかなか今回ですね、みんながどうやれば、もっと川に親しんでいけるのか、っていうような感じのテーマなんですけど、でも、実際のところ僕自身ですね、だんだん上陸して魚じゃない生き物の研究とかし始めてるので、自分自身がちょっと川から離れつつあったりもするんですけど。まあでも、自然そのものに関して、なるべくちゃんと理解しようというふうな感じで、あとは大学の講義ではね、環境問題とか。環境問題と言ってもいろいろありまして地球温暖化とかに関しては工学系の先生がよく講義とかされてるんですけど。環境問題の中でも、生物多様性に関する、いろいろと話したりしてます。若い人たちの認識とか、まあまあ変わりつつあるなみたいなのも思いますし、どうやれば伝わるかっていうのは結構、いつも悩みながら講義とかはしています。ちなみに鉄崎さんがアユカケが一番おいしいってお話されたんですけど、僕、大学4年生のときにアユカケ、研究してまして、脳下垂体とかホルモンが海に行ったり川に行ったりするとき、どう変わるのかなみたいなことをやってたんですけど、その大事なことだけ取っちゃえば、あとはあれなんで。いろいろ煮たり焼いたり揚げたりいろいろ食べて、これはうまいというのはね、一番やっぱり、思っていました。そんな感じで、よろしくお願ひします。

(小島座長)

はい。ありがとうございます。今日のテーマ、ディスカッションなんですけども、テーマ二つ。一つは、川で遊ぼう、面白いっていうのと、今、鈴木先生がおっしゃった、ちょっと質問にもありましたけど、川が綺麗だというお話と、それから、川が豊かだ、海も同じなんですけど。綺麗、豊か、そのマトリックスですよ。その話、二つ、していきたいなと思うんですよ。

まず、最初のテーマで川で遊ぼう、川は面白いから、ということなんですけれども。人との距離なんですけど、川で遊ぶという話とですね、川と遊ぶっていう。川で遊ぶっていうと、河原でバーベキューやる、川で遊んでるんですよ。別に、河原で遊んでるっていう。ずっと今お話を聞いているのは、川と遊んでる訳なんですよね。川の中に。川と遊ぶということが、どうしてなくなっちゃったのか。

土岐川って、子供の頃はですね、瑞浪からちょっと先に行くところすごく綺麗、夏は冷たくてですね。プールがなかった時代ですから、僕の小学校はですね。川で泳いでたんですよ。これ、当たり前なんですよね。しばらくするとですね、タイル工場の排水がわーっと入ってきて汚くなってですね。高度経済成長ってやつですね。またすごくさっき、映像で見てたら、えっ、すごく綺麗になってる。こういうふうに思って見てたんです。だから、昔は綺麗で、すごく汚れて、また綺麗になってる。だけど昔の綺麗な時はですね、川で遊んでたんですね。海に行って遊ぶっていうのはあまりなかったの。水難事故といえば、川でおぼれて死んでるのが、毎年夏になると2人とか3人いたりとか。ということがあって、危ないんだけど、遊

んでたっていうが昔なんです。さっき鉄崎さんが言った一体いつと比較するのか、どんな川と遊ぶのか、どんな遊び方があるのか、ということについてまた、またちょっとお話いただけますでしょうか。

(鉄崎氏)

そうですね、やっぱり川というのは親水性が失われてきたってのは非常に、いえるのかなとやっぱり、親水、親しむということですね。さっきもちょっと話したけれども、親水性のない川というのが見放されてしまって、当然、川をきれいにしようという、そういう、エネルギーにも変わらない訳なんですよね。例えば、さっき言った庄内川というのはやっぱり、まず庄内川の水を飲んでない。あと、じゃあ、庄内川のどこで遊ぶかってときに場所を見つけるのが大変なんです。確かに親水性はありそうなんだけど、河原見ると、例えば河川敷なにがある。野球場だったり、公園だったり、あれ、厳密に言うと、川で遊んでる訳じゃないんです。河川敷で遊んでるだけであって、多分そういうところからどンドンどンドン川に入るといことがなくなってきた。

僕は今、静岡でほとんどメインに仕事してますけど、静岡の清水に興津川(おきつがわ)って川があるんですけども、興津川っていう川は、まず河原まで車を降りれるんです。そういう場所がいっぱいある。河原に車で降りることがいいとは言わないけれども、皆さんね、そうやって河原に車を止めてバーベキューして川で必ず、潜って魚見たりして取ったりして遊んでるんですね。やっぱ、そういう場所がものすごくたくさんあるんですよ。そういう川なんで、結局皆さん、ごみ持ち帰るんだよねちゃんとね、遊び場だから。多分そういう親水性が非常に大事で、そういう場所がなくなっているってのは確かですね。

じゃあ何で川で遊ばなくなったのかっていうのを考えると、まず子供たちの生き物離れ。これ、子供たちが生き物から離れたのではなく、親が子供たちを生き物から離してしまった。親がまずね、大体ね、虫嫌いなんです。ほとんどのお母さん虫嫌い。蛙怖いって言うお母さんの子供は蛙怖がる、絶対。あと、僕、川の学校やって子供たちに、獲った魚あいつらどうするって聞くと、昔僕らは100%持って帰りたいって言ったはずなんです。ところが今の子供たちは、60%ぐらいが逃がしてやろうって言います。これは、ある種、人間としての優しさでもあるんですけどね。逃がしてあげると。ただ、その裏には何かあるっていうと、お母さんがかわいそうだから逃がしてあげなさい。どうせうちに持って帰ったってあんた死んじゃうんだからって必ず言うんです。僕はそんなお母さんに、お母さん、死んじゃってもいいですから持ち帰らせてあげてください、って言います。これはもちろん希少種は逃がしますよ。希少種は逃がす。例えばオイカワとかカワムツみたいなたくさんいる魚は持って帰らせてあげると。死んじゃうことが駄目なんじゃなくて、死んじゃったときに何を思い、どういう行動を取るかが一番大事。それが子供の心を育むので、ぜひ持って帰らせてあげてって言うんです。多分世の中全体がそういう世の中になってる。生き物から大分離れちゃってるんですね。それと最後にもう一つは、やっぱり河川工法として降った雨をどっと海まで一気に流すために、直線の三面コンクリート張りの川を作ってしまう過ぎたというのが大きいと思います。それによって、本当は川に、僕だってね、自分の子供連れて行きたい。ところが、ここじゃもう危なくて泳がせられないなっていう川だらけなんです。都市河川は。

もちろん長良川とか木曾川とか、矢作、豊川の上中流はもちろん違いますけどね。そういう、親水性が持てない、ここでは遊ぶにはあまりにも危険すぎるという、流れも早い深さも深い、一定、もう逃げるような瀬がない。瀬が無いということは水生植物も生えない。というような川づくりをしてしまったことがやっぱりどンドンどンドン親水性を排除してしまって、今の子供たちと川との差をどンドン生んでしまったという、そういう流れだと思います。

(小島座長)

今井さん、絶滅危惧種なんですけれども、周りの友だちと見てですね。どうすれば、みんなも一緒に遊んでくれるのだろうか。そんな感じを持ったことはありますか。或いはどうすればいいって言うか、何かアクションを起こしたとか。そういうことについてはどうでしょう。

(今井君)

やっぱりそうですね。僕も名城大学の生物環境科学科っていうところにおいて、生き物とですね、環境とのうまくつき合い方とかそういうのを学んでるんですけど。ここに行けば生き物好きの人がいっぱいいるだろろうと思って、そこを選んだのも一個あるんですけど。まあ、いませんでしたね。生き物が好きかなってのもいるんですけど、やっぱり生き物をペットとして見てたりとか、そういったのが、結構多いんですよ。特になんか釣りとか、そういうのをやるけれど、まあ、危ないからあんまり行きたくないとか。そういった人、結構います。僕からしたら、おお、ちょっとびっくりだなってのはあるんですけど。僕自身がですね、昔、おばあちゃんの家が飛騨の方にあるので、川でですね、さっき大橋さんがやってらしたみたいな船を浮かべて、竹竿でこいでですね、さし網引いて、あと、夜には火もやったりとか、そういったのを小5, 6とかその時にはにはもうやってました。大体親父がですね、上から見たときの川の深さってのは全然当てにならないから、こうやって見えたときは気をつけろとか、こういう水流がおきてたときは絶対近づくなとか。そういったのも全部教えられて、そのときからですね、こうゆうところは絶対行っちゃいけないってのは全部わかってて、でも親父、川に入ることは駄目とは言わなかったんですよ。そういったところだけ気をつけろというふうに言っただけなので、そういった経験を生かして、なるべくちょっとでもね、釣りとか魚とか取れるよとか、まあ、先ほど鉄崎さんも言ってらしましたが、やっぱり食べるとおいしいよとか、そういった身近なところでですね、紐付けていくと結構興味持ってくれる人多いんで、やっぱり行って食べてみたりとか。そういう遊びをしつつ、こうゆうところは危ないから、そういったところには、あまり友だちを近づけないようにするとか、そういった、ちょっと大きく言ってしまえば、保護者みたいな感じですけど、そういった視点でちょっとこっちからどンドン近づいていくっていうふうにして、なるべく友達とこっち側に、数十人ぐらいは引きずり込んだかなっていうのはあります。

(鉄崎氏)

だいたい、友だちはあれだろ。みんな、そのTシャツ着てるの？「しじみ」って書いたTシャツ。

(今井君)

「しじみ」ってのは…。

(鉄崎氏)

他にいたよね。いろいろ。

(今井君)

いますいます。

(鉄崎氏)

どんなのがいたんだっけ。「しじみ」と。

(今井君)

あと、「ひじき」がいます。

(鉄崎氏)

「ひじき」がいるんだね。何だっけ。他にもなんかいたよね。

(今井君)

あと、「なめこ」と「もやし」がいます。

(鉄崎氏)

普通はさ、大学生みんなビームスとかシュプリームとかのTシャツ着てるけど。あんまそんなTシャツ着てる人いないもんね。

(今井君)

そうですね。なかなかあと、なまずが「ごっとう」って書いてたりとか、なんかそういった、博物館とか水族館とかで買ってくると思うんですけど。意外とそういった人が多い、言ってしまうと確かにちょっと普通じゃないかなってのはありますけど。

(鉄崎氏)

すいません。少ないんです。こういう人は。

(小島座長)

昔には戻れないんですけども、昔に戻るってのは。川で遊んでたのはプールがなかったからなんですよ。小学校にね。それで小学校にどンドンプールを作っていくって、泳ぐのはプールになって、川では泳がなくなっただけなんですよ。夏暑いからやっぱり泳ぐんですけど。さっきの土岐川のところで泳いでいたんですけども。そういうことだし、遊ぶことがないから田んぼに行ってますね、カエルの話だと、カエル捕まえて、むいて、糸につけてザリガニを釣るとね。子供の遊びとして、当たり前前の遊びだったんですよ。昔はね。ところが今はです

ね、東京で、田植え実習みたいな子供たちを連れて行く教室があったりするんですね。まず、あぜ道を歩けない。怖い。で、田んぼの中は泥ですよ。入れない。だから、親がですね、いいことだねって言って親もちょっと一緒に来たりして、子供を連れてくるんですけど。子供がまず、あぜ道から入れないですよ、そもそも。入ったこともないし。だから、そこへ入れて、田んぼの中に裸足で入れて、初めての体験、というところまで持ってくる。そういう姿を見てるとね。川はおろか、あぜ道は歩けない、田んぼは歩けない。で、やってみて初めての経験、っていうね。だから、その前はね、もうみんな田んぼって、入るの当たり前前の時代にはもう戻れないんですけど。そういう意味では、生き物って近くにいたんですよ。

(鉄崎氏)

今、あれですよ。みんなね、虫取ったりね、魚釣ったりしてますよ。みんなね。「あつまれ動物の森」で。「あつ森」ですごいみんな。ゲームです。

(小島座長)

ゲームなの？

(鉄崎氏)

ゲームです。すごいそうやってゲットできるゲームがあって。みんなそれやっています。

(小島座長)

リアルじゃなくて？

(鉄崎氏)

ゲームです。

(小島座長)

なるほど。それは知りませんでした。向井先生、今の学生どうですか。

(向井委員)

まあ、生き物好きなんて言っても、なかなか、抽象的な感じですよ。なんかゲームとかのそういうバーチャルの世界で生き物取ったりとか集めたりとかそういうのはね、やっぱりみんな、好きなんです。だから、潜在的には、なんかそういう欲求があるんですけど。でもね、リアルの世界でそれができない、っていうのはありますね。「あつまれ動物の森」だけじゃなくて、もうちょっと前だったらモンスターハンターとかね、ああいう、あとポケモンGOも、あれはやっぱり、生き物、虫取りの新しい形みたいなふうには言われてましたね。何ていうか、自然に親しめない、親しまないっていうのは、小さいときからその川は危ない、近づいちゃいけないっていうふうには、もうとにかくひたすらそうやってこう教育されているっていうのが大きいように思うんですね。で、生き物を持って帰れないとか、親がこう生き物を嫌いだっていうのは、でもね、それは昔からそうだった気がするんですよ。僕らの世代だ

って別に親がね、何か持って帰ろうとしたら、やめとけって言ってたと思うんですけど。だからその辺、それだけじゃなくてやっぱり、根本的に、安全志向がとにかくもう徹底してるっていう。自然の中で動くともうやっぱりリスクがありますよね。川で泳いで絶対、誰1人溺れないなんていうのはやっぱりありえない。じゃあ誰もおぼれないようにしようと思ったら、誰も近づかせなければ、それは溺れる人はいないわけで。でも、それをやってるところ、幸せな生活になるんだろうかっていうのは、非常に悩ましいところだとは思いますが。

(鉄崎氏)

子供の好奇心っていう意味では、昔も今も変わってない気はします。ただ、さっきも出たように、虫とりにいなくても、ゲームで虫とりをして、満足しちゃってるのは確かなんですよ。だけど、そういう、もう本当にカブトムシ取りに行こうぜって言って連れて行くと、やっぱり実際に捕まえたカブトムシ、自分で捕まえる方が、もうカタルシスは断然高まるし、楽しい。要はそういう機会がないというのが一つ大きいし、川で遊んでほしいとはいえ、やっぱり遊ばせられる場所も少ないし、多分そこだと思う。やってみたら楽しい。好奇心は昔と今も変わらない。でも、やるができないというのが現状じゃないですかね。

(小島座長)

なんか川も危なくしちゃったっていうのもありますけどね。いろいろあったりしてね。で、海なんですけど、鈴木先生ね。潮干狩りって今どうなってるんですか？やっぱり川で遊んだりとか、夏になったら蒲郡に潮干狩りに行こうねって。みんな言ってたんですよ。今どうなってるんでしょう。

(鈴木委員)

潮干狩りっていうのは、壊滅的ですよ。他から、アサリを持ってきて、放流して、まあ一種の釣り堀り状態ですよ。そういう場所が多くなったんです。もう一つはね、海で子供たちを遊ばせると言うことが、きっかけとして潮干狩りってすごく大事なんですけど。昔は自然な干潟で、アサリを掘っていて、貝をとるだけじゃなしに、ハゼがいたり自然を学ぶという、重要な一大イベントですよ。ところが今ね、そのアサリがまずいない。だから、放流して撒いてるだけだから、それをとってもあんまり面白くないですよ。なおかつ、当然漁協はお金を入れてアサリを放流してるわけで、自然に湧いてるわけじゃないから、お金をわざわざ出してまた持って帰るわけなんです。本当に昔、昭和40年代のアサリ、例えば竹島あたりのアサリっていうのは、モンローアサリって漁師さんはよく言って、貝殻から肉がはみ出るくらい太ってた。ちょっと表現悪いけど、そういうアサリばかりです。非常に美味しかった。ところが今のアサリっていうのは、やせちゃって、貝殻ですよ。うん。中は、何もない。シジミみたいな。だから結局そういうことがあるから、どんどんどんどん潮干狩りに親も行かない、子供も行かない。すると海に親しまない。一方では、このくそ暑い状況ですから、なかなか熱中症だとかっていうことに過剰に対応してしまうと。だから、本当にアサリが2万トンあったのが減ってきてると。ここ平成24,25年ぐらいからですよ。それは2万トンあったやつが急に1万トンになり、それがもう3千トン、2千トン。も

う今はほとんど取れない。その理由が、いろいろ分かってきてるんですが、ここではちょっとテーマと今日違いますから私も詳しく言いませんけど、基本的には海の栄養不足。海の栄養失調だと思います。一番大きなのは、ただ残っているのは、さっき今井君がお話した河口域ですね、大きな川の河口域は非常に状況今でもいいんですよね。さっき気になったのは今井君、例えばそのサワラとかね、ブリとか、本来ならば、湾の真ん中や湾口にいるのがものすごく、河口に突っ込んでくる現象が。ヒラメもそうです。最近名古屋港の中でもヒラメがいる。もうみんな釣り人喜ぶんですよ。岸からカレイやヒラメが釣れた。ブリが釣れた。漁師さんも、そういうところ狙って、魚を捕る。最近の現象です。これはなぜか。海の栄養不足。大きな捕食魚が、大型の魚が、肉食性の魚が餌がないから、餌があるのが河口になるんですよ。だからそこ突っ込んでくるんです。海自体が相当痩せてきている証拠なんで。まさにそういう面で、今、今井君が最近はいるんですよって言うのはね。海の栄養不足。

(鉄崎氏)

河口域の主食はボラですか。

(鈴木委員)

最近、河口域、例えば名古屋港、金城ふ頭や庄内川も、カタクチイワシ、マイワシが結構。なんとなく来るとイワシの卵がすごく名古屋港も一番多く、最近多いんですよ。これはやはり、本来であると伊勢湾の中央部辺りで産卵するものが、やはり餌不足。動物プランクトンや植物プランクトンを求めて、河口部に突っ込んで来る。それを追いかけて、大きな魚が、本来そこにいるはずないっていうか、あまりいない魚がそこに突っ込んでくる。だから、釣り人は、最近海が綺麗になって、こんな魚が取れますよって言っても、それは違いますよと。海が本来の姿から変わってきた証拠ですよと私は言うんです。

(小島座長)

例えば大橋さんのように、いわゆる漁業を生業、魚を捕る生業とする漁師と、それから、釣り人です。極端に言うとスポーツフィッシングね。似て非なるものなんですけれども、川漁師ていうか内水面漁業、もうほとんど養殖になっちゃてるんですよね、今はね。そういう意味では、川漁師がいなくなると、伝統漁法も廃れる。無くなっていく。何かこう、言葉が無くなると文字も無くなるみたいな。そんなような現象が、今あるんですけれども。代わりに釣り人って結構多いですよ。上州屋さんを筆頭としてですね。釣りの産業ってすごく大きくて、釣り竿も高いし、釣りの服も高いし、これは一大産業としてしているんですけど、このスポーツフィッシング的な、キャッチ&リリースをやっているような、そういう人っていうのは、生物多様性ていうか川を守るうえでの力になりますか。

(鉄崎氏)

それはもちろんなります。はい。ただ、何を釣ってるかが結構やっぱ大きくて。何釣ってるのかなって思うと、やっぱバスフィッシングだったりすると、それは全く真逆の効果を生んでしまいますね。ずっと今まで増えてきたわけですから。だけどバスに関しては、僕も



そのテレビ業界にいてわかるんだけど、やっぱりこう、昔のようにどンドン釣って楽しい、釣って楽しいという番組がちょっと減ってきてます。やっぱり、ただまだ相変わらずやっぱりオンエアはされてるので、それを見た子供たちが釣りをね、スポーツとかおしゃれから入ってしまうと、もうちょっとなあとはいいます。僕はやっぱりじゃ何から始まったかというやっぱり、フナに始まりフナに終わるっていうんですけど、やっぱりギンブナから入っちゃうんですね。それから、自分の田舎は犬山市の入鹿池のボート屋やってるもんですから、もう入鹿池で一ちゃんと一緒に、フナを釣るところから入ったので、何て言いますかねその入鹿池がどういうふうに変わって、途中からワカサギが急に増えて、ワカサギ釣りのメッカになり。そうしたら気が付いたら、バス放流されて、もう今バス釣りのメッカですよやっぱりね。そこはね、悲しいですよ。もうフナから入った人間としては、だから釣りというのは非常にこう、両方の側面を持ってると思うんです。本当に自然へのアプローチの入口として良い部分と、やっぱりその釣りのゴミって半端ないですからね。それはもう、テグスに引っかかってしまう海鳥たちいっぱいいるし、海の中を潜って見てみると、重りの鉛はいっぱい落ちてるし、両方の面を持っているのが釣りかなという気はします。

(小島座長)

今井さんどうですか。若い人から。

(鉄崎氏)

若い人釣りやってる？

(今井君)

僕とか、もうそれこそ、11月の時も言いましたけども、多い時には、週7で釣りみたいですけども。

(鉄崎氏)

勉強せい。

(今井君)

そうですね。釣り行ってるんですけど。やっぱり、釣りも僕からしたらやっぱ結構、魚を知らない釣れないんですよ。なので釣りしてる人っていうのは、専門家の方とかが科学的に証明してるようなことを感覚的に理解している人が多くて。釣りをやってる人を、特にブラックバス釣ってた友達を、ちょっと環境に巻き込んだ友達が言うと、ブラックバスが好きな人はこういうことを考えてるから、我々もなんかちょっと違うという、今までも堅い言い方もしたけど、もうちょっとこっちからちょっとね、姿勢を低くして歩み寄ったりとか、そういうことすると、今までとは違った視点の仲間が得られるから、もうちょっと環境保全よくできるんじゃないのっていうのは、結構あります。

特に先ほどの鈴木先生がおっしゃってた、海の貧栄養化問題とか、今まで釣れてなかったところに魚が集まってるとか、それ僕も結構あって、例えば、この下の豊浜に、イワシがめ

ちゃめちゃ入ってるなんていうニュースありましたよね。あれも特にそうだと思ったんですけど、その周りを見ててもあまりいないんですね。で、何の理由かという和多分、連日人が餌をばらまいてると思ったんですよね。で、釣ったイワシとかみても、ほぼ全部おなかに卵を抱えてるんですよ。やっぱそういった繁殖前の栄養がないのかなと。先ほど小島座長がおっしゃいましたけど、今、コロナでプールが無かったりとか、外出できなかつたりとか。がいてる所に行けないとか。そういった状況っていうか、昔のプールが無かったとか、そういった状況に似てると思うんですよね。で、今、川とか海とかに行こうと思っても、例えば海だと関係者以外立ち入り禁止だったりとか、川だと安全には入れる場所が無いとか、そういったので例えば誰でも行けるキャンプ場とか、釣りができる漁港とかに人が集まりすぎちゃってってニュースもこの前やっていましたよね。

そういったので、みんなが、本来は得られるはずだった自然環境のものを、人が代替できるからって思ってるかもわからないですけど、どんどん潰しちゃうっていったわけですよって言うので、やっぱそういうところにも、例えば人がやっている以上やっぱ絶対落ち度はあると思うんで、悪いところもあると思うんでそういったのが出てきたのかなというのは、最近ニュースとか見てて思いました。なんで、やっぱ釣り人を、ゴミをすてるからとか、ブラックバスを放流するからって言うのもあるんですけど。うまいことそういう人たちをこういう環境問題とかに目を向けさせられたら、心強い味方になるんじゃないかなというふうに思います。

(鉄崎氏)

本当にいい釣り人と悪い釣り人と差が激しいよね。

(鈴木委員)

釣り人でね、釣りって言うのは、やっぱりさっきの潮干狩りと一緒に、特に子供さんにやって欲しい一つの遊びなんだけど。やっぱりそういう、自然との駆け引きの中でいろんな危ないことやおいしいこと、楽しいこと。自然に誰かに教えられる訳じゃなくて、学ぶわけ。その場所だと思うんだ。でもねえ、今の釣りって、あれは釣りじゃない。生き物をいたぶって喜んでるっていう感覚でしかない。本来生き物の命を頂くっちゅうことは、自分がそれを食してみる、そういう意味で生き物の命の尊さってのを感じるわけ。さっき、鉄崎さんの写真の中に、実は私とおんなじことやったなと。ミシシippアカミミガメ、私もね、食べたことある。ちょっと抵抗あったけど、食べられますよね。

(鉄崎氏)

でも、5日ぐらい綺麗な水につけるとかないと駄目ですよ。

(鈴木委員)

はい。捕りたてはやめた方がいい。今、釣りするときに、キャッチ&リリースって言って、釣った魚を逃がす。ところがね、ルアーとかに引っかけた魚って死んじゃうんですよ。もう絶対に死んじゃう。釣り針が引っかけた魚も死んじゃう。だからキャッチ&リリースって

いう考え方っていうのは自然保護でもないし、一体何なのかなと思うんですよね。やっぱり生き物を食べる、そのために釣るっていうのが、そもそも釣りの本来で、だから魚を釣るにしてもやはり本来、生のエサで釣るのが、私は釣りだと思う。どうも最近その釣り人がそういう風潮があるっていうことと、もう一つは汚すんですよ。とにかく、もう漁港なんかに行くといひどもんで、釣り針なんかロープにかかっていると、それで大怪我した漁師さんを私も何人も知ってますからね。だから、漁師さんにしてみれば、もうとんでもないよ。これも堤防に入れるな。入れるなという、漁師が勝手に海を占有してるからって、無理無理なんか文句あるかといって入ってくる、けんかになる。だからね、釣り人も、そこら辺を組織的にやっぱり何かやっちゃいけないこと、やっていいことっていうのを、もっとルール化して、やらなきゃいけないし、テレビの釣り番組のあれは釣り番組じゃないな。ああいうこともね、少し風潮としてはよくないんじゃないか。だから、結局子供にあんまりいい影響を与えないんじゃないかなと私は思う。

(鉄崎氏)

その通りで、メディアの講座やOBの方とかですね、やっぱりずっと昔からバスフィッシングというのをおしゃれに扱ってきて、最後まで食べた番組は1度もないんですよ。で、それを覚えてくれたのは、僕のライバルのTOKIOかなあとか思いますけど、TOKIOはねやっぱり外来種を食べるようになったとかね、それからああいうこと、東京湾で取れたものを食べるようになった。あれはちょっと大きいので、今、世の中の流れはそういう流れになってるのは間違いないです。もう昔みたいにキャッチ&リリースが美談という世の中ではもう今、違いますね。変わりました。はい。

(向井委員)

今いろいろと海の方の話が多いんですけど。内陸の川の方だと、ちょっとやっぱりいろいろ事情が違うかなとは思っています。例えば、食べるって言っても、例えば海の魚は、実際、おいしいじゃないですか。でも川で、じゃあ、アユはともかくとして、それ以外に、取って食べると、実際食べてみればおいしいというのものもあるけれど、でも食べ物はみんな満たされているんですよ。川に行って、ちょっとパネルディスカッションの前に打ち合わせていた時に話が出たんですけど、みんな川に行ってバーベキューやって肉を食ってる。あの、まあいろいろ海の方の話が多いんですけど、内陸の川の方だと、ちょっとやっぱりいろいろ事情が違うかなとは思っています。例えば、食べるって言っても、例えばその海の魚は、まあ実際おいしいじゃないですか。でも川で、じゃあ、アユはまあともかくとして、それ以外に獲って食べると、実際食べてみればおいしいというのものもあるけれど、でも食べ物はみんな満たされているんですよ。あの、川に行って、ちょっとこのパネルディスカッションの前に打ち合わせてたときに話が出たんですけど、みんなその川に行ってバーベキューやって肉を食っていると。要するに魚を食べるために川に行くんじゃないって、肉食ってるという話なんですよ。だから食べるためっていうのは、やはりこう現実的に無理がある。川に関しては。それで、じゃあ釣りをすると漁業する人と、それ以外の遊びの人っている人がいるわけなんですけど。で、川の漁業っていうのは、もうほぼ成り立ってない。専門の漁師なんて、まあ、ほぼいな

い。じゃあ漁協は何のためにあるかっていうと、そのアユ釣りとか、溪流釣りの人たちのためにあるっていう感じなんですよね。だから、その点では内陸の川の方では、漁業と釣りっていうのは実はあんまりこう分離してなくて、結構一体化してるんです。ただ、その人たちが占有してしまっているんで、川で小魚をこう子どもが取って遊ぶ、子どもに関しては見逃されてるけど、それがちょっと大きくなってくるとですね、途端にこう怒られるようになるわけですよ。もう網で魚なんて獲らせてもらえない。川に入らせてもらえない。釣り人が漁師じゃないとため。それだとやっぱり、親しみようがないんですよ。だからそこら辺もうちちょっと何とかならないかなっていう風には思っています。

(小島座長)

なんかね、地元の子供だったら、漁協の息子や娘だったりするから、そういう風に、網でね、あの獲っても良いんだろうとは思いますが、やっぱりこういういろんな長良川河口堰の議論をしてきて、大体まあ整理は、議論は整理されてるんだけど、これがムーブメントにならないっていうか、なかなか、なんか動いていかない。で、それはね、別に長良川だけじゃなくて、生物多様性のことをやっている世界の人たちも同じような思いな訳ですよ。しっかりやらなきゃいけないんだけど、なかなか政治は向いていかないね、社会も向いていかないね、みんなお金の勘定ばかりしてるよね。ということで、その流れを変えなきゃいけないんだけど、そのためには、やっぱり、親しむというか、川を知ってるとかね、海を知ってるとかね。やっぱり知らないとなんとかしようっていう気にならない。やっぱり今日のね、やっぱり今井君のような人が、絶滅危惧種だとですね、力にならないんですよ。だからどういうところからアプローチしていくのかなあと。昔はね、それ自然にやってたんだけど、今はなかなか難しいよね。そこが、どんな場面でも大きな課題にはなってくると思うんですね。

(鈴木委員)

ちょっといい。

(小島座長)

はい、どうぞ。

(鈴木委員)

名城大学の今井さんみたいな人がいるっていうのは、私も心強く思います。私も大体大学の中で孤立してるタイプだから、仲間ですね。やっぱりね、教育も悪い。特に自然関係の教育で、まあ向井先生もおっしゃってましたけど、教育者もそうだし学生もそうなんだけど、まず例えば海を知るための訓練、例えば潜る、海に潜る、泳ぐ、それから漁具を仕掛ける作る。で、船を操船する。で、しけたときでも無事に帰ってくるような訓練をする。つまり、研究する前にそういう訓練をしないと海での研究なんてできない。昔の、昔のっていうか、我々の学生時代のことを言うと、要はその、頭が悪い子元気な子だねって言って、教官によく冷やかされたんだけど、勉強あんまりできないんだけど、海でとにかく活躍することはでき

る。だからそういう訓練が当たり前だったんですよ、海洋系とかいうのは。ところが、ある事件があって、東京、昔の水産、今海洋大学、あそこの館山の実習所で、学生がアクアラング装着実習のとき死んじゃったんです。それからもう、パタッとすべての大学で、アクアラングの装着実習がペケになった。そういうことが要は、今のコロナでもそうなんだけど、一つ何かでると、そのために全部右に習えになっちゃう。これはちょっとやりすぎなんじゃないかな。これはあの、やっぱり、それが全部自己責任になっちゃう。だから、今でも、本人がやるのはいいよと、ただ学校としてはそれ支弁しませんよと、こうなっちゃう。これは全ての学校がそうなんです。だから、やっぱりその教育っていうのは小学校も中学校が海に連れていくときに、学校の先生が「海に入っちゃ行けません」、海に行って海に入っちゃいけませんよって、何を言ってるんだと思ってびっくりしたことがあるんだけど。そういうことがまず一番身近にある問題としてはね、重要なんじゃないかなとちょっと感じるしね。

(小島座長)

二つ目の話題。さっき鈴木先生がおっしゃった、その綺麗で豊かな海とか川。この対極にあるのか汚れて豊かじゃないっていうんですけども、高度経済成長のときに、海も川も汚れてですね、とにかく水質規制をいろいろやってきて、ある意味じゃ水質規制って、あの化学的なもんですから、そういう、重金属やら、危ないやつやら、或いは窒素やリンやら、そういう数値に表れるものを、どんどん減らしてきたわけですよ。それも工場の出口でやってきたから、数が多くなってくればだめだし、ちょっと離れてるんじゃ流れの関係で溜まっちゃうしというようなことがあるんですけども、東京湾はそうですが、綺麗にしたけどアサクサノリはできないとかね。だから、そういう意味では綺麗なんだけど、豊かじゃない海というのが出てきて、環境省の、何年前かな、10年ぐらい前だろうと思うんだけど、少しずつ変えてきてるんですよ。単に綺麗綺麗ってやってると海が死んじゃうということだね。そこについて鈴木先生がおっしゃった、綺麗にしてきたんだけど、海が貧相になっているっていう、そういうことについて。

(鉄崎氏)

あの、僕は河川環境と海の海洋環境を語る上で今後一番大きなテーマとなるのはそこだと思います。まさに。「綺麗にし過ぎちゃったんじゃないの問題」と。これはですね、例えばアサリの話さっき鈴木さんから出ましたが、やっぱりアサリ漁師とか三河湾の漁師に聞くと、みんな口をそろえて言うのは、「まあ海綺麗になりすぎたんだわ」って必ず言います。これは。実際の僕の体感として思うのは、三河湾めっちゃめっちゃ綺麗になってます。昔より。で、アサリが獲れないのも、本当に獲れなくなってる。身も小さい。じゃあ代わりに何がいるかっていうと、東幡豆あたりだとチョウセンハマグリ多いですね。これはあの、まあアサリよりも、塩分を好む貝ですけども、これがちょっと増えしてる。これは確かに、海が変わりつつあることは間違いないですよ。こんなに三河湾みたいな閉鎖海域が一番影響受けるのはやっぱり外の潮の影響よりも何よりも、何よりもやっぱりこれらの注ぐ川の問題が一番大きいと思います。じゃあ一体どんな水が注いでくるか。これは、昭和、僕のじっちゃん時代、もう本当に昭和10年、20年、その頃というのはきっと水がものすごい澄んでて、そして栄養もあ

って、魚も貝もわんさかいたっていう時代だったと思うんですね。で、やっぱり河川環境、海洋環境、どこにターゲットを絞るべき、そこだと思いうんですね。それに向けて何とか頑張る。じゃあ、その頃の澄んだ水と今の綺麗に一見見える水の違いは何か。やっぱりその栄養塩のあり方というとか、質と言いますか、もうそれに尽きると思いうんですよ。これは僕専門家じゃないから本当はわかんないんですけども、何が違うんだろう。多分きっと昔の方がいっぱいいろんなものを出してたと思う。だって、下水処理場ないわけですから。だけどそれが、自然の力が、それこそ水生植物であるとか、土であるとか砂であるとか、そういったものが、ものすごく良い感じに分解して、浄化して、そして出口にはちゃんと干潟があると。多分そこでとれてきた水が一番いい豊かな綺麗な水であろうと思いうんですね。じゃあ反面、今はどういう水を流してるかっていうと、一見綺麗には見えるけども、その栄養はどっからきてるか。多分、山の森じゃないですよ、メインは。きっと洗剤に含まれる窒素やリンだと思いうんですね。そういったものが若干残ってて、それがまあ栄養塩という形で海に注いでる。多分そういう質が全然違うんじゃないかと。見た目分かんないけど。そんな気がします。で、一番ここ難しいのは、ずっと僕は川を綺麗に、海を綺麗にっていう活動をしてきた。だけど、もう今はそういう時代じゃない。次の時代に入ったんですよ。だからといって鈴木さん、海を汚そうって言えないですよ。でもそういう時代になっちゃってるんですよ。どうしたらいいんですか。

(鈴木委員)

あの、まず今、昔と今の違いっていうのは、昔は綺麗で豊かだった。それはどうしてじゃあ綺麗さと豊かさっていうのが共存できたかっていうと、川にはあのアシ原があり、河口には広大な干潟があり、海にはいろんな海藻が繁茂していた。で、なおかつ海岸域と陸域と海とは、今は全て防波堤それも10m、20m矢板で全部地下水が行き来できないような海になってるんだけど、地下水も海にしみ出るような状況があった。ただそういう中で、見た目の水もすごく、例えばアサリが植物プランクトンとかを、十分な速度でろ過してる、水はすごく綺麗。なおかつその栄養があるから、植物プランクトンとか、珪藻なんかはすぐ入る、入るけど、動物がいればすぐ食べる。だから、見た目の、要は見た目、例えば赤潮ような状況っていうのは、実は赤潮になり得る状況あるんだけど赤潮にならないっていうのは、それを即座に食べつくす動物群衆がいたから、あったから。だからそれ、そういうことで豊かさと綺麗さっていうのは共存していた時代から、今どうなったかって言ったら、アシ原はないわ、護岸で区切られた、海と干潟は全部埋め立てられて港湾施設用地になってるわ。浅い海は深く掘られて、航路になってるわ、もう要は生き物動物群衆が安定してその個体群を維持できるような場所が無くなっちゃう。無くなっちゃってるってどういうことかっていうと、じゃあ水を綺麗にするために下水処理施設で窒素・リンをとりましょう。つまり見かけの綺麗さだけを実現してるっていうのは今の状況だというふうに私は思いうんですね。だから今の状態でどうすんのって言ったら、私は綺麗さをとるのか豊かさをとるのかっていう風に聞かれたら、私は豊かさをとる。もし綺麗な海で泳ぎたいんだったらグアムでも沖縄でも行ってください。見せるからには、アサリがたくさんいて魚がたくさんいて、足をとにかくその海に出せば、ヒラガレイの子がうじゃうじゃと足の裏でもがいてますよってそういう海の方がいい

ね。だから、なんていうかな、本当に欲しい海、ありたい海っていうのは、多分私たちの親父の世代の豊かで綺麗な海だと思ってる。今どういう海だって言われたら、私は少し汚れてもいいから、豊かな海だと。

(鉄崎氏)

今転換期が来てるということですね。

(鈴木委員)

そうですね。

(小島座長)

向井先生一言。

(向井委員)

あの、時間があれですが、栄養塩の不足っていうのではなくて、やっぱり今言われてた、物理的な環境の構造なんですよね。で、あとそれ、川の方でも、結局川の生き物も減ってる、魚も少ないっていうのも、あの水質云々ではなくて結局、下流の方だったら周りの水田地帯とかに魚がこう行き来することで繁殖してたんですけど、それができない。だから、川を綺麗にしようという時も川しか見てない。下流域は本当は平野に網目のように水分が面として水域があったと。それをね、もう全部切っちゃってるっていう風なものかなと思います。

(鈴木委員)

ちょっと良いですか。

(小島座長)

はい。どうぞ。

(鈴木委員)

あと1分ということで、最後にちょっとだけ一言言っておきたい。先ほど向井さんは、河口域のことを非常に重要視され、汽水域ですね、つまり川の水と海の水が混ざるところ。ところが、例えば河口堰とかっていうのはそれを分解しちゃうわけですよ。だから川と海、感潮域がない。で、最近、その、愛知県のアサリがすごく減ってきた理由をいろいろ調べてみると、実はその、アサリがおぎゃーと産まれて、まだ小さい1ミリにも満たないような小さな貝っていうのは、あんまり大きなえさを食べられないんですよ。だけど、そのちっちゃい時に生き残るためのえさっていうのは実は河口域にしかないってことは分かってきたんですよ。例えばクリプト藻のようなものですね。数ミクロンの、特に水温の低い冬場でも増殖できるような藻類は河口域にしか増殖しないんですよ。だからそれがやっぱり大事だっていうこと分かってきて、漁業者も分かってきて、だからダムの問題、河口堰の問題についてすごくピリピリしてるっていうことなんですね。だから、川と海っていうのは、二分されたも

のじゃなしに、その間の曖昧な部分が大事なんだっていうのは私は本当に、最近痛切にアサリの資源不足に関連して調査の中から感じる場所ですね。

(小島座長)

質問に行く前に、今井さん、何か、転換点にある若者としては、コメントありますか。それから、転換点って大変なんですよ。今まで通りやっちゃいけないっていうことになるわけだから、自分で、自分たちで新しいものを作ってかなきゃいけないっていう、そういうポイントにいるっていう、ご指摘なんですけど。

(今井君)

えっと、僕も今年いっぱい学生じゃなくなるんですけども、やっぱり学生っていうのは身分として、めちゃめちゃ便利だと思ってて、例えばちょっと失敗しても多めに見てくれるとか、他にもカバーしてくれる先生がいたりはするんですけど、そういった、何て言うんですかね、ある程度突拍子もないこと、挑戦が許されるような、そういった、そういった人たちが学生とか若者なんじゃないかなと思ってます。なので、まず転換期っていうのは、大事だと思うんですけど、もうちょっとその、若者がですね動きやすい、そういった環境づくりとかをやっていけたらいいなというのは思いますね。例えば名古屋市だと、今、なごや生物多様性センターとかだと、市民の方とか、学生さんとか協力して池干しとかそういうのをやったりしてますけど、やっぱり我々がそういった生き物とかに興味があっても関われないっていうことだったら意味ないんで、そういったところに気軽に、もう何も考えなくてもいいからとりあえず参加して欲しいっていうのがあって、何て言うんですかね、限られた専門家とか、行政の人しかやらないんじゃないかって、みんなで作っているとか、そういったほうに向けていったらいいんじゃないかなと思います。

(小島座長)

ありがとうございます。原田さん、質問の方はいかがでしょうか。

(原田委員)

四つほど紹介させていただこうと思います。鉄崎さんに、これさっきの講演の後皆さん書かれていますので、今のディスカッション聞いてない、という感じで聞いてください。「山崎川でも天白川でも、川遊びをしている人たちはいますか？」というご質問になります。

(鉄崎氏)

山崎川は親水広場が瑞穂区にあるので、そこで遊んでる子供たちはいます。そこは安全なので、で、一番、山崎川って千種区で生まれて、名古屋港で終わるといって、The 名古屋の川なんですけど、他、遊べる場所はもうゼロっていいです。もうそこしか遊べないです。

(原田委員)

密になっちゃいましたよ。



(鉄崎氏)

密になっちゃいますね。他は遊べるような環境ではないので、もう残念ながら1ヶ所だけです。遊べる場所は、天白川の方がまだありますね、天白区からちょっと遡っていったところでね。はい。ただ、じゃあそこで子供たちが今遊んでいるかっていうと、まあほぼ見ないんじゃないでしょうか。

(原田委員)

使われないんですね。

(鉄崎氏)

遊んでないですね。

(原田委員)

鉄崎先生も、そういうエリアをもっと増やすことはできそうですか？使われないから必要ない、と思っている方みえないかな。

(鉄崎氏)

そういえばさっきのお話聞いて思ったけど、ちょっと水生植物増やしたいなとかすごく思います。水生植物が増えれば魚も増えるし、安全地帯も増えていくんで。そうすると、まず子供たちの遊び場を作るってなるとみんな階段作っちゃったりするんでね。やっぱそうじゃなくてやっぱ川の多様性を育むような河川工法とかもやってく上で、じゃあここは安全な場所ができたから子供たち遊べるねっていうようなところはもうちょっと増やしたいなと。

(原田委員)

先生、プロデュースでできたらいいですね。

(鉄崎氏)

お金がない。残念ながら。

(原田委員)

お金を出すところがあったらね。だから場所があればいいのではなくて、そこに生き物がいてこそってことですね。

(鉄崎氏)

そう思いますね。生き物いないところで子供は遊んでもつままないからね。

(原田委員)

そうですね。次、いきますね。「楽しいお話で、鉄崎さんありがとうございました。名古屋市民でありながら庄内川についてほとんど知らずに反省です。認識を改めました。ありがと

うございました。庄内川には、岐阜と愛知県を境に、名古屋のごみ処理場があります。その影響はあるでしょうか？」

(鉄崎氏)

あそこはだいぶ離れてますからね、その処理場は。ただ、その処理場も行くと、本当に、ちょっとかなり気持ちが滅入ってしまう場所ですけど。はい。そこの影響はそんなには感じないです。はい。むしろやっぱりそうですね、藤前干潟とか、の方が、やっぱりね、目を向けるべきだなあとと思いますけど。はい。

(原田委員)

「長良川についても、この庄内川のビデオレポートのようなものができればいいと思いました」ということで、ぜひ、また長良川バージョンを作ってください。

(鉄崎氏)

長良川はいい川だと思うんですけどね。

(原田委員)

委員にどうですか？あ、これちょっと私の声でした、すみません。ね、小島さん。では続きまして、今井君に質問です。「河口堰下流の汽水域での貴重な報告をありがとうございました。ヤマトシジミやハマグリは調査はしていらっしゃるでしょうか？採ったり食べたりしていらっしゃるでしょうか？」という質問です。

(今井君)

はい。実はですね、そのヤマトシジミもハマグリもですね、桑名だと採っちゃいけないんですよ。なので、そもそも採れないんですよ。なんで、採らないようには気を付けています。なので、ちょっとシジミって書いてありますけど、長良川でシジミを採ったんじゃないかと、庄内川の汚れたシジミをいろんな人に食わせまくったら、ちょっとどんなものなのか、一種のバイオテロですよ。それでもうシジミシジミと言われるようになっちゃったんですよ。それでシジミなんですけど。

(原田委員)

シジミ採ったら密漁者になっちゃうから、ちょっとここでシジミアピールは、ほんとは。

(今井君)

そうなんです、長良川でシジミ採ったっていうと、結構、まあ別にいいっていう人もいますが、実質それ密猟になっちゃうんで、僕はその辺、厳しくやろうとかな、っての自分では気を付けてやっています。

(原田委員)

清く正しい大学生が、途端に変わっちゃうんですね。罪な話ですよ、ねそうだとしたら。そのことは何か思いますか。もう一つ「今井さん、近くに住む年配の方々から昔の川の話聞いたことなどありますか？」

(今井君)

そうですね、僕の、例えば、友達のおじいちゃんだったりとかすると、結構その海苔の漁師さんだったりとか、あとシジミの漁師さんだったりとか、結構漁師さんの子供、孫、そういった友達が結構多いんで、結構長島の方の航空写真を見てももらえるとわかるんですけど、港がですね、なばなの里の近くに1個と、あともうちょっと下流のところに、23号線あたりに1個あるんですけど、船を持っている人は結構多いんですよ。なので、昔からそういった、長良川で生きてきた人たちの話をよく聞くことはあります。

(原田委員)

どんな気持ちになります、今井さん、それ聞いて。

(今井君)

そうですね。河口堰とかができちゃったのはしょうがないし、ある程度、役にたってるってのもあるので、強くは言えないんですけど、やっぱり、昔に戻れたら、ちょっといいなっていうのはありますね。ちょっと羨ましいですよ、ね。

(原田委員)

羨ましいですよ、ね。冒頭にもおっしゃっていたようにね、魚いっぱい生き物いっぱいが見たいですもんね。ありがとうございます。最後にもう一つ、これは鉄崎さんですね。「内水面漁業にとって、川魚は、アユと、その他の魚はひとまとめにして雑魚に分かれてしまいます。この雑魚の呼び方を改めて欲しいなと思います、ってことなんですよ。その意見をしてるんですが、なかなかいい方向に進みません。例えば、溪流魚とか清流魚としてほしいのですが、まだ雑魚のままです。お願いをどこにしたらいいか」そんな。

(鉄崎氏)

これはもう名前どころというよりも流通の問題だと思います。流通してないですからね、スーパー行ったら売ってないわけですから、これはもう、本当に、何かこう1個、メディアでも何でも、実はオイカワおいしいんだみたいな、こんな食べ方ある。で、それがスーパーに並べばいいんですけど。多分もうそうはならないし、正直言って僕はもうそうやって欲しいとも思わないです。それがお金に変わるようだと、あのもうそこらじゅうの川でやっぱりね、密漁、それがネットで売られたりもしてますんでね、やっぱりね。だからそういうふうにはなっていないので話。したくないので。基本的に魚をお金に変えるのは、もう漁協さんだけの方がもう絶対いいと思いますし、それとちょっとまた別だと思いますね、魚を守るということと、うん。

(原田委員)

ありがとうございます。

(鉄崎氏)

ごめん、最後に一個だけ。もうね、今後難しい問題というのは、さっきの鈴木さんが最後におっしゃった、三河湾、伊勢湾のあり方。これやっぱ駿河湾、静岡の駿河湾と勝負してもしょうがないので、やっぱり内湾である三河湾、伊勢湾というのは、綺麗を取るか豊かを取るかって、今本当にその時期に来てると思う。それともう一つは、今一番僕が思うのは、異常気象って、これだけやっぱ雨が降って熊本の川決壊ってなったときに、やっぱダムがね、やっぱり必要じゃねえかっていう声もう上がってるんですよ。なので、ちょっと今時代に合わせて、愛知の場合は設楽ダムの問題もありますよね。やっぱそういったことが今後今までみたいに、一筋縄ではいなくなっていくなあという。それも含めて新しい時代に入ったので、ちょっと難しいことだらけだなっていう感じはしてます。

(原田委員)

そのためにも、みんなが考える場がないといけないですよ。

(鉄崎氏)

そうですね。考えること話し合うこの場がまずは第一です。

(原田委員)

誰かがやってくれるだろうと思っていただけそうじゃなくて、私たちが意見して、考えなきゃいけないんだという、今日、御意見くださった方もいろいろ意見してるんですけど、尊い活動されている意見だったと思うので。でも、今日のような場で、皆さんが意見下さり、また、県の職員の皆さんと共にこういう場があるというのはすごく、いいかなと思いますね。鉄崎さんまたお力をお貸してください。では、座長また質問受けますか、会場から。シンポジウムに対しても、受けますか？あと5分くらいあります。一つだけ質問ありましたら受けまじょうか。シンポジウムでも。あ、はい。どうぞ。

(参加者)

入れるの忘れていたので、今井さんにちょっと聞きたいですけど。

(原田委員)

はい、どうぞ。マイクの方へ。

(参加者)

若い人からみて、SDGsというのは、金持ちの大人が考えたことだと思うんですけど、それに対して何か問題点という、感じてますか？

(今井君)

えーっとそうですね、問題点。これ多分言い出すとすごいキリなくなっちゃうんですけど、1個その、先ほど他人ごとになりやすいと、そういった話もあったと思うんですけど。例えば僕らだとすると、生物多様性とか限られたところになってくるんです、やっぱりその17個あるうち、当てはまるのが例えば4個か5個だったりとかあるじゃないですか。いいように言えば、役割分担とも言えますけど、悪いように言ってしまうと、自分はそこをやるから他任せだよ、と投げやりになっているようなものなので、何かもうちょっと、せっかくぐるっとなんか輪になっているところもありますから、もうちょっと繋がりとかをもてるような物にできたらいいんじゃないかなというのは、ちょっと思いますね。

(鉄崎氏)

SDGsも愛知万博もそうだけど、あれはもう企業のためですよやっぱり。企業のためです。愛知万博も。つまり、持続可能で、環境にやさしい商品を生ろうという、それが愛知万博です。SDGsも持続可能な開発ってのはSDGsだし。でも、僕はそれは否定しないですよ。じゃあ経済を全て取っ払って、もう自然だけを守っていく。そんな生き方人間できないんで、そういう意味ではSDGsも愛知万博も、上手に、なんていうのかな、企業を上手に乗せて。で、最終的には、だってやっぱ環境に優しくない商品よりは環境にやさしい商品がまだいいわけですから。何か上手に我々市民が、うん、企業をこう乗せて、ともにやっていくというのが一番いいんじゃないですかね。ただ、環境保護の原点とはほど遠いと思います。当然。

(原田委員)

企業もバッジつけてるかもしれないんで。

(鉄崎氏)

そうですね。多分ね。

(原田委員)

だからそのことというといいかもしれないですね。では座長お戻ししますけど、最後締めて頂いて。

(参加者)

まだ質問いいですか。

(小島座長)

どうぞ。

(参加者)

すみません。岐阜市から来ました。長く皆さん活動してきて、これまでに水量は河川維持

流量でなんとか戻ってきたり、あと水質はなんとか綺麗にしてきました。それでその、栄養化はちょっと、また別の問題ですけど、私たちが今、川の中で欲しいのは、岩とか土とか適度な土砂が欲しいんです。特に天竜川はほんとに、浜松の砂丘がなくなってしまうようなことになっていくと思うんですけど、この土砂がなかなか供給されるのは難しいので、川が路盤化になってしまっただけで、殆ど川の生物がなくなってしまう。これを解決するのに、なんかこういう場でもテーマにして、何か掲げてもらえるとうごくありがたいと思います。よろしくをお願いします。

(原田委員)

ありがとうございます。座長から一言どうぞよろしくお願いします。

(小島座長)

専門家もいますから、検討していただこうと思います。今日はどうもありがとうございます。今の、例えばコロナもそうなんですけど、環境もそうですけれども。例えばコロナ対策で、命と健康守るという格好で、公衆衛生対策を、いわゆる公衆衛生的介入っていうんですけどね。これは一生懸命やると。経済が回らない。お店が大変だ大変だという声がずーとあって、つまり大企業だけじゃなくて、小さなお店も大変だっていうことになる。そうすると、とにかく客は来てもらわなきゃいけない人が来てもらわなきゃいけない。で、人が動けば感染が拡大する。沖縄ちょっと大変なことになっちゃったわけですけども、人が動けばそうなる。でもやっぱり、一方の公衆衛生だけでやってたら、経済がダウンして、みんなが困っちゃう。4年後は、中小企業が倒産すると自殺が増える。統計的にそうなんですけどね。そういうこともあって今度は公衆衛生的な、対策をするのが脅威なんです、お店にとっては。人が来なくなっちゃう。あんまりきつい対策をやってくれるうちがつぶれちゃう。で、今、そういうふうになってるわけです。温暖化も同じなんです、そのせめぎ合いをやっているわけですね。で、温暖化を止めるためには、CO2の排出をやらなきゃいけないということ。そういうことをずっと30年間やってきたんですけども、結局、世界的には止まらない。森を燃やしちゃいけない、森はどんどん減っている。で、温度はどんどん上がってきて、日本近海は1.5度ぐらい上がってるから、南の海で台風が起きてんじゃなくて、日本近海で台風が起きる、こういう状態になってきている。これも温暖化対策を一生懸命やってCO2を減らせば、緩和されるんですけども、進行度合いがゆるめられるんですけども、そうすると産業が難しいんだよ。これもおんなじですね。SDGsも多分同じで、一生懸命環境対策をやると、経済が成り立たない。これはよく途上国から言われることなんですけれども、そういうせめぎ合いの中で、一方だけをやってると困る人が出てくる。困る人は別に大企業だけじゃないってところが、今回コロナの問題で、認識してるんですけども。そういうようなところもあったりしてですね。結局それが、どっちが強くなるか弱くなるかですよ。公害のことを言えば、高度経済成長のときは、とにかく経済だ経済だといって喘息で死ぬ人もいても大丈夫。とにかく経済だやってきて、たくさん死んでくると、やっぱり公害だ対策やんなきゃいけないよ、とより戻しをする。そういうような中でやってきてるので、生物多様性も同じような、ベクトルが働くわけですよ。そういうベクトルをどういうふうに制御して、一

つつつ進めていくか。これが国際会議でいつもやっている今度の COP。前の COP10 もそうでしたし、今度の COP15 もそういうことなんだろう、というふうに思います。今日は、すそ野を広げるためにどうしたらいいんだろうかと。専門家の研究、検討だけでは、世の中を変えられない変革。起こらない。非常に今日は、若い人のご意見も伺って、参考になったかなと思います。今日はどうもありがとうございました。

(原田委員)

ありがとうございました。パネルディスカッションは、小島座長、鉄崎幹人さん、今井洸貴くん、そして鈴木委員と向井委員です。ありがとうございます。これを持ちまして愛知県長良川河口堰最適運用検討委員会県民講座、長良川河口堰と生物多様性を終わらせて頂きます。ありがとうございました。